

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年六月廿日印刷納本
昭和十年七月一日發行

土淨

七月號

第一卷第三號

法然上人鑽仰會發行

土淨

中村 辨康 師 著

法然上人の信仰生活

四六判一三〇頁
高雅上品な装幀
御影寫眞入
定價三十錢(送料四錢)

法然上人の辿り給ひし信仰の道こそ、われらがしるべなり。

著者の言葉——精魂をつか

らしめて求めに求めた三十年の求道生活とその當時のあらゆる階級の人達を魅し盡した四十年の信仰生活とが何んなに近代人の胸を突くかを振りかへつて見たいと思ふ。

それが形に現はれてゐやうとゐまいと、信仰を求め宗教に憧れるのは人間本來の姿である。古來宗教界の巨人と仰がれる聖者は悉くこの人間本來の姿を最も輝かしく明瞭に示顯した人間の精神の鏡であり、また萬人の中に潜む信仰心に奔りの路を與へ、その萌芽に開花の時を與へた慈雨である。故に若しそれ等巨人の信仰生活の内部を覗ふことが出来るなら、我々は日常無意識の中に捨てゝ省みなかつた生活の瓦礫の中に、突如輝然として輝く向上の珠玉を見出すのに快を恣にし、貪しくも思はれた己れの生活が如何に豊富な内容に充されてゐるかを再發見して驚嘆を禁じ得まい。法然上人の巨にして無双なる求道生活、信仰生活の迹を慕ひ、その法悦にひたらんとするも時に現代生活の汚濁を洗ひ清め清淨なる人間本來の姿に立返らんがために外ならぬ。

發行所

法然上人鑽仰會

油繪『法然上人の聖像』出づ!!

藝術の至境は?……瞻仰の瞬間に理想の生命を味識するにあり!

宗教の極致は?……永劫の憧憬を現實の胸寸に感得するにあり!

十年の苦心、鏤刻の結晶、髣髴として上人に拜謁するの思ひあり。

小橋 麟 瑞 監修

伊達幸太郎 揮毫



本聖像は監修者十數年來の宿願を實現せるものにして、揮毫者伊達畫伯は在米十八年主として肖像を研鑽しセントルイス美術學校教授たり、その神技は彼地の畫壇を驚嘆せしめ歸朝して東京にあるや時の帝國美術院長子爵黒田清輝畫伯は最高の推辭を惜まざりし本邦洋畫界の先覺者にして人格高潔の士、寔に聖像の筆者たるの資格充分ならん。監修者と揮毫者との協力苦辛三ヶ年の日子を費して昭和十年二月廿五日髣髴として生けるが如き上人の慈容は完成せられ今や世界的名畫なるべしとの推稱の辭を恣にしつゝ全念佛門流を驚喜の渦中に投じた翻期的傑作である。

豎一尺二寸、横一尺五分、原色十度刷精巧高級品
領布價一葉金五圓也(額用)送料當方負擔

便宜取次 法然上人鑽仰會

聖像一葉各に『法然上人十德頌』(小橋麟瑞著四六版百頁)及『聖像謹解』各一部を謹呈す。『十德頌』のみ御希望の方は定價廿錢、送料二錢にて御頒ちします。

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番



浄土 七月號 目次

・表紙……………井上正春
・扉……………樹下行雄

三來
夜話

死を恐れぬ娘

増上寺主 大島徹水(二)

十六
門記

黒谷法然上人傳 二

佐藤春夫(六)

隨筆 蠟燭の光

野口米次郎(四八)

私の
信仰

祖母と念佛する心

醫學博士 石川日出鶴丸(一二)

迷信を克服するもの……………眞野正順(二四)

家庭を明るくする

- | | | | |
|---------------------|----------------------|-------------------------|----------------------------|
| ☆念佛貯金……………谷 孫 六(二四) | ☆主婦たるもの……………水町京子(二五) | ☆健康第一……………醫學博士 小池 重(二七) | ☆理解と協力……………文學博士 椎尾 辨 匡(二八) |
|---------------------|----------------------|-------------------------|----------------------------|



古川柳と夏さまざま……………代田重雄(二〇)

信仰相談……………佐藤良智(六八)

法然上人をめぐる人々(二)

賀茂のほとりの聖者……………佐々三三雄(五〇)

幻住記……………十一谷義三郎(五八)

犬に御注意……………岡本俊一(五五)

落ちてゐた草財布……………浦田洋一(六七)

流雲……………南一郎(二九)

大場城悲史……………大谷忍恕(三六)

禪勝房の法語……………(四八) 笑ひ話……………(一〇)
うらを盆迎へて……………(一一) 縁山初夏……………(五)

南無する心……………一枚起請文講義……………(三) 中村辨康(七〇)

編輯後記……………(八〇)

浄土 七月號 (第一卷 第三號)

東京帝大佛教青年會編修

上製版・特製豪華版

佛教聖典

現代人におくる標準的佛教聖典！

忽五十版

編修委員

文學博士 高楠順次郎	文學博士 常盤大定	文學博士 長井眞琴	文學博士 宇井伯壽	文學博士 宇野圓空	文學博士 橋田邦彦	醫學博士 小野清一郎	法學博士 西義雄
---------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	---------------	-------------

男・水野弘元・稻葉文海・坂本幸
光・藤田海龍・成田昌信・梶芳
超・日・柴田道賢の各文學士

本聖典は東京帝大佛教青年會に於て青年學徒の切なる要求を満足せしめ、併せて普く世に佛陀の聖教を傳へんがため、上記佛教學者を總動員して新たに編修せられたもので、古來七千卷或は九千卷と稱せらるゝ經典中の精髓を收録し、日本祖師の選述は特に之を重視した。従つて公平にして宗派に偏せず、又極めて學的價值高き現代標準の佛教聖典である。行住坐臥に是非一本を備へ給へ！

定價

上製版

菊半截・小型判
高雅上品裝幀
本文七百十四頁

特製版

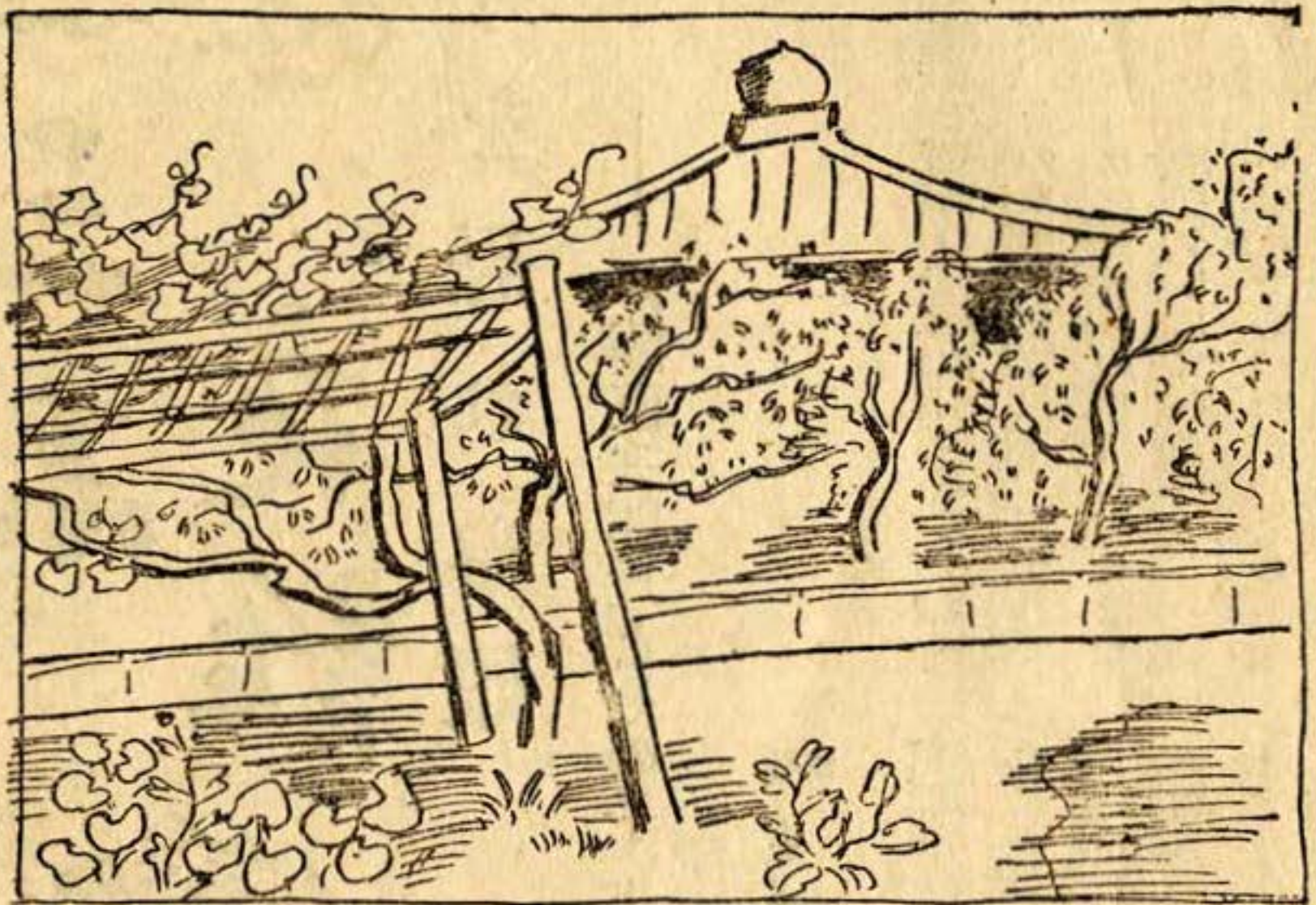
獎半截・ポケット判
金文字入豪華版
三方金堅牢裝

大阪市西區阿波座下通
振替大阪一八三〇〇番

三省堂

東京市神田區神保町一
振替東京一三五五番

淨土 七 月 號



阿彌陀ほとけに
たのむぞと
わがおもふひと
なべて言へ
汝れ人中の
分陀利華
南無阿彌陀佛

(佐藤 春夫)

三 来 夜 話



死を恐れぬ娘

—— 伊藤直次郎氏とその子 ——

増上寺 大 島 徹 水

京都取引所は先年大蔵省で全國の模範取引所として推されたほどのものであるが、その取引所創立以來、四十八年間立派に勤めあげて、死後もなほ關係者の追慕してやまぬ伊藤直次郎氏の家族のものの話を少ししてみよう。

もともと伊藤家は由緒正しい家柄であつたが、この直次郎氏のお父さんの代には京都北野天神の神官を勤めてゐて

經濟的には甚だめぐまれぬ生活をしてゐたのであつた。それにお母さんといふ人が嚴格すぎるくらゐのやかましやで少年時代の直次郎氏はかなり苦勞をしたが、それが將來の忍耐強い性格を養つたものと見ても差支ないだらうと思ふ。—— 京都取引所が出来て、同時にそこへ直次郎氏が勤め出したのは二十のときであつた。時代も明治中葉前のこ

ととて、取引所に勤める者達はみな實地仕込みばかりで、學問があるから、勝手な地位で振舞ふなどと云ふことは全然なかつたのである。現在でもさうだらうと思ふが、これは他の大商店にも例のあることだ。子僧、使ひ走りの下つ端から漸次に上位置にのぼつて行く、——それには實直と勤勉と信用が第一の武器である。この直次郎氏もさうした過程を踏んで來た人であつたが、後年取引所長兒玉源太郎氏に取引所内の事一切は伊藤氏の意見を聞いた上で、とまで信用されてゐたのは、實に直次郎氏の影日向ない人格の反映であつた。所内の人事問題が起るときは、「あれは伊藤さんに認められてゐるから。」また、「認められてゐないから。」といふことが唯一の尺度になつてゐた點だけでも、直次郎氏の存在が如何に取引所の重大な鍵となつてゐたかゞ分るであらう。

ところが、かういふ信念の人にもたゞひとつの心の患ひがあつた。それは伊藤氏がまことに家族運にめぐまれなかつたといふことである。四五人あつた子息達に次々と逝かれ、一人きり残つた愛娘にも、二十三まで育てあげて逝かれたのであつた。

わしはこの娘さんがわしの學校（京都家政女學校）を卒業した縁で、伊藤氏とも知遇を得たわけであるが、流石にこの親にしてこの子あり、自分の教へ子をほめそやすわけではないが、娘さんの死に臨んでの美しい心がけは、世の娘もつ親達へのよき教訓になるであらうと思ふ。

この娘さんは大正十二年關東大震災の時、丁度上京してゐて厄に遇ひ、一時行方不明を傳へられて、そのため伊藤氏が娘の搜索にあらゆる手段を盡す一方、各方面の神社佛閣に淨財を捧げて加護を祈つたほどの父親の秘藏つ子であつたが、仕合せにも助かつて父娘再會の悦びを得たのであつた。しかしその後どうも娘の健康が勝れず、家庭にあつて専ら養生につとめてゐたが、一向はかばかしく行かないので遂に東山病院に入院させることになつた。こゝで娘可愛さから、伊藤氏は百方手を盡して醫學界の權威の人々に娘の容態を診察してもらつたが、病勢募るばかりで如何することとも出来なかつた。

或日、伊藤氏がわしのところに見え、娘が先生のお話を承はりたいとのことゆゑ、是非一緒に來て欲しいと云はれ

たので、わしは早速病院に出かけて行つた。そして病床の娘さんに、

「病氣のときの心得は學校の修身の時間に教へた通りを守ればいい。病はお醫者さんまかせに、身のまはりのお世話には看護婦や親身の方々にゆだね、自分の心はひたすらに佛を念じて、けつして我儘を云つてはならない。」

これだけ云ふと本人は大そう喜んだ顔を見せて、

「起きて御挨拶申さなければなりませんのですが、病床ゆる臥せつたままで失禮いたします。」と、仰向いたまま胸のところまで手を合せて、わしの方に何度も頷くやうに見せた。わしは娘さんのかなり憔悴してゐる様子を痛々しく思つたが、わしの云ふことを靜かに聽き入れてくれたことに満足して戻つた。それから四五日して伊藤氏が禮に來られ、「親戚の者が見舞ふと、あとで病人は疲れが出て困る」とこぼして仕方なかつたが、あなたが來られてからは急に自分が明るくなつたとよろこんでゐました。どうか度々來てやつて戴きたい。」かういふことだつた。

わしも承諾して、それからはずとめて時間のゆるす範圍

で見舞つてゐたが、年がかはつて、いよいよむづかしいと醫者から家人に云ひ渡されてからは、わしは病人に念佛申すことのみをすゝめた。

「生命といふものはお醫者さんにも分らぬ。これは自分の運命だから。佛を念じ、死生を度外視せよ。」

わしは一切の説明を止めて、少し氣の毒にも考へたが、かういふ風に云ひ云ひした。しかし病人はいつも黙つて頷くのであつた。

それが臨終の日の朝、わしは丁度他縣に行つてゐて死に目に會へなかつたが、病人はふつと眼を覺ますと枕頭の父親に、

「私は駄目だらうと思ひますが、どうかこの逆順のことも諦めて下さい、お父さん……」

かう大きく瞳を見開きながら、低いがしつかりした語調で云ひはじめたさうである。

「私が死ねば、伊藤家は絶えることになります。ですからどうぞ親戚の方から後とりをおさがしになつて下さいませ。」

これには父親の伊藤氏も頭が下つたさうである。急を聞

いて駈けつけて来た親戚知人に對し、病人はたゞ、
「涙はいりませぬ、死は怖ろしいものでありませぬ、皆さ
んも御一緒に念佛を申して下さいませ。」
さう呟くやうに云つて、却つて見舞客の悲嘆の囁きを叱
咤したほどであつた。

さうして念佛の聲が次第にかすれて、もはや絶えたかと

縁山初夏

里見波哉

玉垣に夜あけて青梅の静けさ覺ゆる(青陽院廟所三句)

梅雨晴ぞ叫び、こゝで朝鮮鳩といふなる廟所

鳴聲の精悍さ思ふ鳥の、茂りから晴てる朝

昔は汐のさしひきもあつた、池に藤が實になり

雨蛙の一つもをれば、とこの庭に暮れる木や草

思つたとき、ふつと病人はもう一度眼を開いて、あたりを
眺めまはすやうな仕草で、
「お念佛を……」と確めると、そのまま靜かに眼を瞑つた
のであつた。……

一人娘を死なした父親の心は察するに餘りあるが、後日
伊藤氏はわしに對つてかう語つた。

「私は娘の死を悲しいと思ひますが、それ以上私は娘に
對して、親にも眞似られぬほんたうによい手本を示してく
れたことを感謝します。最後の日に私に云つた娘の言葉、
あの念佛申しながらの最後の様子、あれだけの心構へを實
地に見せてくれたことは、父として二十三年育て上げた甲
斐があります。私は寧ろ死んだ娘をよろこんで世間に吹聴
したいくらいです。」

この伊藤氏についても未だ云ひたいことがあるが、娘さ
んの死後、取引所勤務五十年を期して隠退し、餘生を靜か
に念佛三昧に送らうと計畫して、いろいろの信仰道場の勸
募にも應じてゐたが、あと二年を餘す四十八年目に、六十
七才で逝かれたことだけを附記して置く。



前回にひきつづいて十六門記による語り直しを御覽に入れます。前回は黒谷源空上人傳と題して置きましたが上人の呼び名はなるべく一定させたいといふ編輯部の方針を尊重して改題致しました。

第五 受戒樂求閑居門

(出家の戒を受け世捨人の生活を樂しまんとし給ひしおん事)



久安三年丁卯の十一月八日に、上人はいよいよ出家して
佛法僧としての戒を師から授けられた。時におん年僅に十
五歳であつたが、或る時、師僧に對して申すのであつた――
「出家受戒の本望もおかげさまでお早達せられました。

今度はいよいよ住ひを山林のなかに尋ね求め、生涯を大自然のな

かに埋めたいものでございます」

と聞いた師僧は、

「せつかく容易には受けられない人間の身で生を受けたの
です。まあ假りに名利を捨てて俗社會から遁れるのもよろ
しからう。ですが、容易に遇ふことの出来ない佛法にめぐ
り遇つたのですから、せいぜいこの法を學び修めずばなり
ますまい。叡山に登つて來たといふ手前だけでも、宗門の
お經文六十卷位は讀んでしまつて置かれてから後に本意を
達げられたがよろしからう」

と忠言を呈したものだから、上人はそれに答へて、

「わたくしが世捨人の生活を樂しまうと申しますのも、つ
まりは名利のために心の散亂するのを免れて専ら心靜かに
お經文や法論、さてはその解釋などの書を學びたいと存す
るからでございますが、師のお言葉は背いてならないもの
でございますし、仰せの學を修めることは本來の希望でも
ございます」

と申し述べておん年十六歳の春、始めて天台の三大部（法
華玄義、法華文句、摩訶止觀）を授けられるや、あらゆる
手段を盡して一心不亂身を勵まして勉強懈なく三ヶ年を

經て六十卷を讀破しその奥義を究めた。そのすぐれた理解力は先哲を超えしのぐばかりであつた。

第六 發心離山住谷門

(志を決して山を去り黒谷に住み給ふおん事)

久安六年^{（元庚午）}九月十二日、おん年十八年で、上人は始めの黒谷のお寺に入つて慈眼房の叡空上人を師となされた。この方は眞言秘密の法境を深く究め、また天台の戒律にも明るく達して、學力は並ぶ者もないばかりか、求道の心最も深く、まことに人の師たる位を十分に具へた方であつた。上人が志を決したと聞いて喜び讃へて、

「慈悲の徳を具へた人が、年若くて早くも名利を捨てようとの心を發したのは、まことに法の約束にかなうた法然（自然）の上人であるから、法然といふのを房の呼び名にされるがよい。さうして實名は源空とつけられよ。これははじめの師の源光の上の字と、わたくしの名の叡空の下の字と

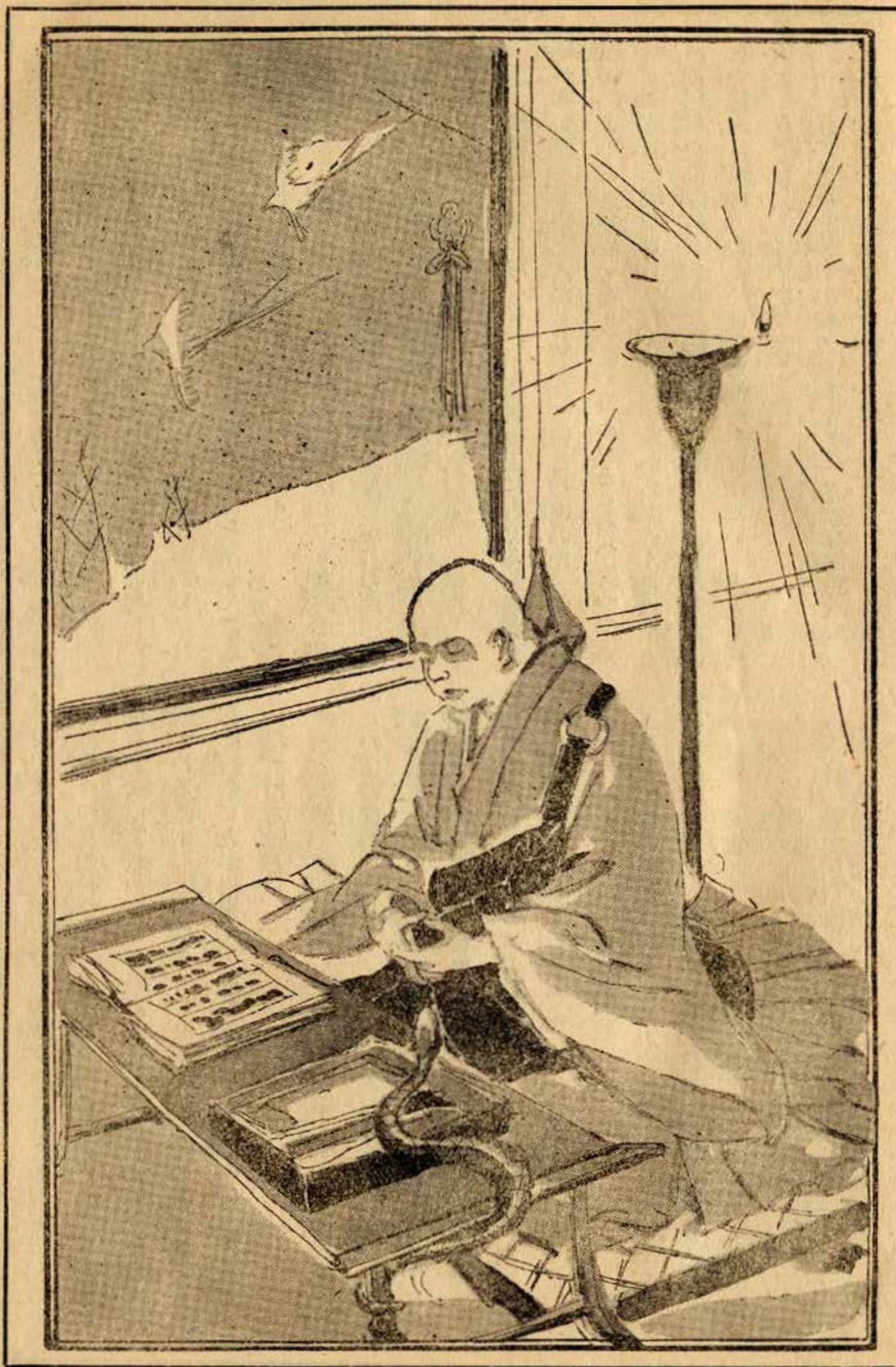
を組み集めよ」

と申されたといふ事である。

一體、法弟聖覺が（と原文筆者が申してゐる）黒谷の様子を探査して見るに、谷は深く流れは清らかで、世俗の騒がしさも煩はしさも跡を絶つた地である。人の行交ふ路は細々と草に深く埋もれて人跡も幽かである。世に隠れ棲むには尤も好都合である。その上に聖き法の書は藏に満ちてゐるのだから、學を修めるに自づと心もはげむ。また本尊が權威を耀かしてゐるから、行を正して怠るべくもない。俗世間を遁れて籠居を目的とされた上人が此の場所に目をつけられたのは甚だもつともな次第である。上人がこの地に生まれ、さう年月も経たないうちに當時の佛教の主流をなしてゐた天台、眞言の双方の法理をも戒律をも一身に兼ね修めて、法の生命を叡空上人から稟け承がれた。

第七 披擲一代聖教門

(當時のあらゆる佛教を深く研究されたおん事ども)



當時のすべての教義は食を忘れて日ねもす目を通し、あらゆる宗派の講義書は眠りをやめて夜もすがら勉強した。

教に關する文を多く暗んじ、法の道の道理と意義とをしみじみと悟つた。此篇にはいろいろ多くの事どもがあるけれども、多くは略してそのなかの三五の例だけを記して置かう。詳しくはとも書ききれないからである。

一、暗夜に聖教を御覽になるのに、燈なしでも室内が明かであつた。現に白河の信空上人（法蓮房）がこの瑞相を拜見して身の毛がよだち、感涙を頻に催し、深く上人の徳を尊重されたものである。

二、華嚴經披讀の時、青蛇が經机の上にとぐろを卷いた事があつた。信空上人がこれを見て怪しみ怖れた。（四十八卷傳によると取り捨てても直ぐもとのところへ歸つて來た。法蓮房は蛇のきらひな人であつたから大へん畏れたとある）其夜の夢に、大きな龍が形を現じて、自分は華嚴經を守護する龍神である。自分を怖れる事はない、上人を守り奉らんために顯現したと言つた。

三、法華三昧を修行し給うた時、大白象王が修道の場所に姿を現はした事もある。

四、或る時上人が自分にお話をなされたお言葉に、「わたしの生れつきの性分で、どんな大部の書物でも三遍これに目を通せば文章の意味は暗記してしまふ。わが國へ渡つて來てゐる諸宗の教へは廣く目を通して、その深意はあらましに悟ることが出來て、それぞれその宗派の承認と許可とを得てゐる」と。

五、大納言律師寛雅に遇つて、三論宗を習ひ給うた時、この宗の法門に關して、御自身の御意見を述べ給うたので寛雅は是を聞いて全身汗まみれになり、ものも言はずに落涙して、有難さのあまり、秘藏の書物を取り出して、自宗の法門を委ねるほどのすぐれた器量の人もない。あなたはも早此法門に到達して居られる。これを差上るに足るといふので、残らずそれを渡された。

六、南都の後に僧正を贈られた藏俊僧都に對面して法相宗を學ばれた時、上人が自分の意見を述べ給うたところ、藏俊は、最初はおなたの理窟はあまりはつきりと致してはゐないと聲高に申してゐたが、追々舌を卷いて信服し、やしばらく耳を傾けてからは、掌を合せて讚美して申すに「自分の承けついでゐる法門に、これほど深い意義があつ

たとは今まで氣づかなかつた。あなたは何にせよただの人ではありますまい。佛さまがお姿をかへて現れて居られるやらも知れない。どうぞお願いですから、最初の御意見に反對した過ちを免されんために、一生の間供養をさせて頂きたいものです」と言つて、毎年供物を送りとどけられたものであつた。

(四十八卷傳には學問には創見といふものが大切である。師の傳を受け賣りするだけならわけはない。自分は、諸宗



『まざまざとゐますが如し魂まつり』と佛家奇人談にあり、『御佛に後生をまかせて此の世には、忠義はたらく魂まつり』と福山櫻にあるやうに、盂蘭盆の行事は昔から人々の心に古きを尋ねると云ふ美はしいものを植えてゐるのであります。平素は佛壇へ朝一度の供養するだけであるが、三度の食事とはもとより、午前午後のお茶受、夜睡眠にお茶を献ずるなど、全く生ける人に仕ふと同じ様であります日々行ふとするのをつい

見ることの出来ない良風美俗であります。

このうら盆に僧を招じ讀誦善根の供養をしたことが傳へられておるのであります。が、棚經が行はれたのは徳川時代より始まつたものです。外交的に諸種の惡幣を生じ基督教が傳播して、その中に不穩な取沙汰さへ生ずるに及んで、幕府はその幣書を未だに防ぎ國狀を安定せんがために、佛敎を保護し、僧侶と力を合せて、佛敎の信仰を

ともみな章疏を見て自分で會得した」と申された上人の言葉が引いてあるしました「自分は聖敎を見ない日はない。木曾の冠者―義仲―が都に亂入した時ただ一日聖敎を見なかつた」ともある。上人の修學の見解方針と態度とを見るに足ると思つたので思ひ合すままをここに書き添へて置いた。

以下次號

すゝめたもので、この時に『宗門改め等の政策的なことが行はれ、僧侶が各家毎に、嚴重に宗門調査を試みたとも見られてゐますが、その他面から見ると、盂蘭盆の精神が日本國民の心に深く受け入れられてゐたことが見られることが出来ます。

この棚經は何時頃からか？ 憲教類典によると、寛文年間から一般的のものとして行はれました。棚經に關聯して宗門改めのことが出て、この點については今日からみて功罪を論ぜられるのでありますが、棚經の供養の心が祖先崇拜の精神と合致して益々善果をむすんだのであります。

祖母と念佛する心

醫學博士　石川日出鶴丸

「短きかな人の命よ、百歳に達せずして死ぬ。たとひよ
り長く生くるとも、また老のために死す。」かう釋尊は「老
の聖訓」を垂れたまうたと聞く。

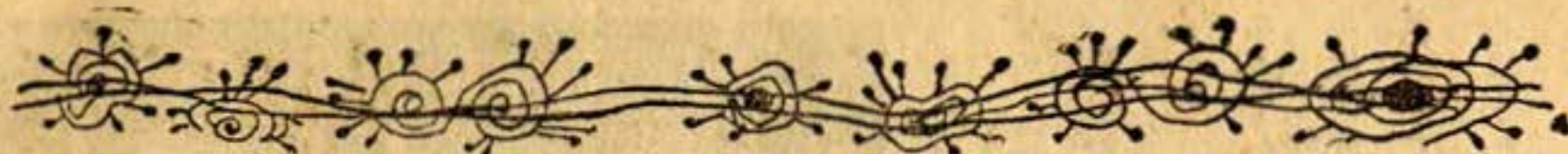
私を限りなく愛し慈しんでくれた私の祖母は、この
聖訓を知らなかつたが、この人生の短い嘆きを超えて、
「譬へば蓮華の上の露の染まらざるが如く、解脱せる者
は見聞思惟に染まらず。」といふ佛の仰せを身につけて、
世の様々のことに心を配りながら、然も、それらを思ひ
患ふことなしに過したのであつた。私の記憶にのこる
祖母の姿は、そんなやうにも思はれる。

祖母は幼い私を伴つて朝夕佛間でお念佛した、——た
ゞそれだけが何かしら尊い姿として思ひだされ、自然科
學者となつたいまでも、「ほとけさま」「お念佛」と口癖に
云つた祖母の聲が、私には人生のほんとうの依處として

聞えてゐるやうである。

私は自分の仕事の傍ら、佛書に親しむことを覚えても
う二十年にもなる。佛教の原理と云つたものについては
故佐々木月樵師にもよく指導をうけたが、私に念佛生活
の眞の意味を體得させて下さつたのは、故土川百萬遍御
法主であつた。これは私の佛縁豊かなためであつたかとも
思つてゐる。

はじめ私は、佛教の理論が本來は諸行無常、諸法無我
涅槃寂靜、といふのに、一方では御淨土を説き、御念佛
をすゝめるといふ矛盾に疑問をもつてゐたが、法然上人
の一枚起請文が上人一代の結論であると聞かされ、これ
を拜讀するうちに、いつか疑問は理論の解決を俟たずに



消えて行つた。それは自然科學者としての私と、祖母の姿に自己の魂の故郷を見出す私とが、二つであつてしかもたゞ一つになつてゐるやうなものであらう。

私には元來、祖母の感化によるせゐるか、念佛申す生活が、完全なと云ふか、落着いたといふか、何かしら「あるべき」生活として、無意識の中に考へられてゐたものである。それが時たま所謂佛縁に會ふ毎に、反省され、深められて行くのであつた。或時期には念佛三昧を志し、念佛生活のありやうは法然上人の如くに數萬遍の日課念佛を唱ふべきかと思ひ、自己の仕事を辭める決心をして、そのために附隨する家庭内の整理に取掛つたことがあつた。然し事實はさう簡單に行くわけではないし、私は日夜疑惑と逡巡の生に心痛した。けれどもいまにして思へば、私は自身のすべてをみ佛の前に投げ出し、「仕事も念佛である」との解決を親授されたよろこびに生きさせて戴いたのである。現在私は、上人の仰せのやうに、「漁りしながら念佛申す」こゝろに、何らのおそれも危ふさもなく暮してゐる。み佛の慈光の下に坦々として自己の仕事にいそしんでゐる譯である。

私はつねに、「一枚起請文」中の「たゞ一向に念佛すべし」の句を、こよなく有難く拜誦してゐる。私の祖母もたゞ一向に念佛してゐたのであり、智慧第一であらせられた上人もたゞ一向に念佛し給うた。俱に「人の命よ百歳に満たずして死ぬ」といふ人生の事實を事實として承認し、しかも「蓮華の上の露の如く」世事に染まらず、患はず、念佛された。

私は日常佛前に額くたびに、さういふ氣もちから、他の經典を誦するよりも、一枚起請文を拜誦することがいちばん有難い氣がしてならない。その中でも、「たゞ一向に念佛すべし」が眞先きに胸に來る。それが私には、一切の佛典の結論のやうに思へるし、何らの作爲を構へず單刀直入に「あるべき道」を指示されるものとして受けとれるからである。

我は烏帽子も着ぬ法然房なり、黑白も知らざる無智のものなり、只念佛往生を仰いで信ず、釋迦は念佛して往生せよと勤め給ひ、彌陀は念佛せよ來迎せんと仰せられたり、この一事のみを信じて餘事を知らず。(西宗要)

庭家の明をく

念佛貯金

谷 孫 六

「あなた一錢ございませんか」

「何だい朝から縁起でもない」

「あら、お参詣にまゐります」

「えッ、何處へ？」

「佛様へ……」

「何處の佛様？」

「あらいやですねエ、何處のつて家の佛様ですの、遠くへゆけば、電車賃がかゝりませう一錢のお賽錢を頂いたつて足りはいたしませんわ」

「ふうん、家の佛様へお賽錢を上げるのかい」

「はア先達てお賽錢箱を造つてお供へしてございますの」

「さうかい、僕は一寸も氣がつかなかつた」

「あなたはほんたうに不信心な方ですもの、

でも、觀音様や、お不動様へおいでになればちゃんとお手を洗つて白銅を投げ込んで何か拜んでらつしやいますねエ」

「そりやさうさお前、家内圓滿無病息災とお願ひするんだもの」

「それは結構ですわ、でも、家の佛様はあなたや私達のお父さんお母さんと御先祖様ですもの、少し位の無理は屹度きいて頂けますわそれにはふだんが肝心ですから毎朝かゝさずおまゐりして居りますの」

「ほうそれは感心だな、そしてお賽錢は誰が取るのだい」

「あら、お賽錢ですか、私が朝晩一錢づゝしか上げませんものいくらにもなりませんわ」
「それにしても、お賽錢箱にはどの位たまつ

てるだらう、一寸開けて見ないか」

「いけません、駄目ですわ、勿體ないから」

「いや、ちゃんと、もとへ返して置くからいいぢやないか、お前の御信心振りが見たいんだよ、見せて呉れ」

彼は勤めの出掛の靴を脱いで佛壇の方へ上つて來た。彼女は何遍も押し戻したが、たうとう戻しきれずに佛壇の前へやつて來た。

「ぢやア、お見せします、その代りお線香をお上げになつてお念佛申して下さい」

彼女は小さなお賽錢箱であるボール箱をガチャ／＼させながら微笑ましい顔をした。彼は已むを得ず、お線香を上げて
「南無阿彌陀佛、々々々々々々、々々々々々々々々」

と口の中で稱へた。その中にボール箱がサラリと開いてサラ／＼と一錢銅貨が幾つも／＼出た。

「あら、丁度六圓ございますわ」

と、彼女は五十錢づゝ積み重ねて十二ほど並べて見せた。

「ほう、凄いな、こりやあ、お前何日からこれをやつて居たのだい」

「丁度、三百日ばかりですね」

「なるほどね、朝晩一錢づゝ、六圓だから三百日だ、なるほど、そしてこれをどうするつもりだい？」

「郵便貯金にいたします」

「ふむ、それは宜い考へだが、三十圓と五十圓と貯つたらどうするんだい」

「債券を買ひますわ、もしかするとお父さんやお母さんが三千圓に當てゝ下さるかも知れませんわ」

「なるほどね」

「だから、あなたも毎朝お賽錢をお上げになりませんか、丁度明日はお父さんの御命日ですからね、あなたは十錢上げて下さいましね」

「それは凄いな、しかし三千圓當てゝ下さるとすれば、これから毎日十錢づゝお賽錢を上げやうかな……」

「あら、それぢや電車賃、どうなさる」

「宜いさ、電車の代りに歩くさア」

「それぢやア、大變ですわネ」

「大へんだつて御先祖様はみんな歩いたんだたまには、俺だつて御先祖様とおんなじに歩いて見るさ」

「まア嬉しいこと、それぢや、今日の一錢、貸して下さる……？」

「貸してやるともさ、僕の分とも二錢出すよ」

「さうしますと、一年に十四圓六十錢になりますのねエ」

主婦たるものは

水 町 京 子

「忍辱衣を身に着れば、戒香涼しく身に匂ひ弘誓瓔珞かけつれば、五智の光ぞ輝ける。」家庭はからだの安息所であり、更にたましいの休らひ所であらねばならぬ。その家をあづかる人は、この衣を着、この瓔珞をかけることが、まづ第一の心用意であると思ふ。さすれ

「さうく、十四圓六十錢と云ふ金は四百九拾圓に對する三分の利子だ」

「あら……さうしますと、二人で四百九十圓の元金を持つて居る譯ですのネエ、まア、有難い佛様ですこと」

「南無阿彌陀佛、……………」

「南無阿彌陀佛、……………」

その日から彼氏は父の御命日だけは、必ず歩くことにした。

ばその戒香はその人ひとりの身に匂ふばかりでなく、更に家人の一人々々の身を匂はし、五智の光はその瓔珞をかける人ひとりに輝くだけでなく、その家の中に照りわたるのである。

庭 家 を 明 る す

家庭を明るくする

一體、我國の「家」は、「國」や「村邑」やがさうであつたやうに信仰を中心にして成立したものである。そしてその神に仕へ、神と人との間にあつて、その神意をかひ奉る巫女の役は、大方主婦がつとめてゐた。家の信仰の中心は主婦であつたといへるのである。吾々の先祖の生活は、一から十まで神意によつてなされて來た。時代はうつる。信仰の對象も推し移つてゆく、それが大自然の相であるが、「家」が信仰を中心に行くべきものといふことには變りはない筈である。

「弘誓瓔珞かけつれば、五智の光を輝ける。」主婦がしつかりした信念を持つてゐるといふことが、千萬の方便よりも家の中を明るくする第一義であると私は思ふ。家人が擧つて一つ信仰を持つてゐる家、それは申分なく、これにまさる幸はないのであるが、現状を顧みてそれは容易にのぞまれないことである。

せめて主婦だけでも、心の據り處をしつかりと持つてゐて、その信仰を中心として總ての家事が、執り行はれ、考へ分けられてゆけば、家の中には自ら和やかな、明るい、楽しい空氣が充ちわたるのである。かうした空氣を醸し出す主婦の着る着物は忍辱の衣でなければならぬ。忍辱といふことは、消極的な陰い影をもつたものゝやうに思はれ易いが、勇猛心がなければ出來ない處の強い積極的の意力であつて、「戒香涼しく身に匂ふ」ことになるのである。家の中が明るいといふことは、徒らに賑やかに、慌しく人出入りのあることでもなく、華やかにはしやくことでもなく、「戒香涼しく匂ふ」といふやうに淨らかに、明らかに、和みわたつてゐることである。季節々々の流行の着物の粧ひも、この忍辱の衣をつけた人の前には、光なく力なく、或はみすばらしくさへ見えるかもしれない。この忍辱の衣をつける要のない人は、世の内に一人もない筈ではあるけれども、主婦としての生活には、片時も脱いではならぬ常住不斷の着

物なのである。

忍辱を不斷着として、弘誓の瓔珞を身に飾りとした主婦のおづかる家の中には、秘密といふ曲者も、懷疑といふ小鬼も、剛情我慢の猪武者も、孔雀の羽根を飾つた鳥の顔も、次第に自分に恥ぢて影を消してゆくであらう。——秘し事は眞に家庭生活の曲者、いささかでもそれがあれば家人の間に厭はしい影が出來て、各人の心をくらくする。主婦たる人の最も心すべき事である。——そしてその代りに力と、熱と、愛とが泉のやうに湧き出で、家の中に満ちあふれるのである。

家底に嚴君あり。父母の謂なり。父父たり、子子たり、兄兄たり、弟々たり、夫夫たり、婦婦たり、而して家道正し。家を正しうして天下定る。(易經)

健康第一

醫學博士 小池重

健康 — 家庭を明るくするには、一家の中に病人の無いこと、即ち一家擧つて健康に心掛けることとです。

康 — その健康はどうして得られるか？ 一言に云へば、規則正しい生活、即ち朝は早く起きて、夜は早く寝る、食事時間を間違へないやうにする。食物を過さないやうにする、業務を過度にしたり、怠けたりしないやうにする一定の時間に定められただけの業務を取り行ふこと等。これ等のことを常に頭に入れておれば、夜ふかしだとか、銀ブラだとか云ふことによつて睡眠時間を誤らないやうになる。

(17) 他人の御馳走だからと云つて、レストランやカフェーへ入つて間食をしたり、暴食をしたり、暴飲したりすることを慎むことになる。

然し乍ら人は各々その年齢、境遇、職業、男女、習慣等によつて、その生活様式が様々であるから、習慣を俄かに改めると云ふ事はなか／＼むづかしいことである。さればと云つて、他人と自分とは體質も違ひ、境遇も異なるものであるから、衛生に關する限り、自分本意で行かなくてはならない。

何事にも自分を生かして、自分に適應する衛生法と云ふものがある。それを規則正しく自ら行ふことによつて、健康が得られる。

で、あるから、一家の中に於ても、主人と召使、大人と子供、各々その人によつて衛生に注意することが肝要である。

殊にそれから夏に向ふから胃腸の病を引起し易い。胃腸の病は主として飲食物に原因する

るのが普通である。だから夏期に於ける飲食物の種類、並びにその量は多と大いに異なるものがあり、冬は兎角、脂肪に富んだものが、また夏には淡泊なものが一般に好まれる。冬には温いものを欲し、夏には冷たいものを好む。これは自然の勢であるが、だからと云つてその量を過し、或ひはその品物の善悪良否等に注意しないと、ふとしたことから間違ひを起し、食當りとか、腸カタルとか赤痢とかチブスとか色々な疾を醸すことになる。

一人家庭に不健康なものが出来ても、不愉快な気分になる。まして數人同時に、或ひは引續いて病氣するやうなことがあつては、到底明るい気分になれるものではない。

昔から『病は口より入る』と云ふが、この事實は、多くは、夏期に於て見られることである。お互ひにその點に注意し合ふことが肝心です。

家庭を明るくする

美はしい理解と協力

文 士 博 士 椎 尾 辨 匡

尾張のある所へ演説に行きました。その会場には學校の人達が集つてゐました。間もなくその會へ私を招待した或る方が見えて、御自分を紹介されて、私は道樂者で、我儘者で、皆んなの困り者でしたが、關接に先生のお陰ですつかり治りました。これも全く奥さんのおかげであります。と云ふ中にその方の奥さんが入つて來ました。それは數年來信仰のことで、屢々お尋ねにも來られ、そちらへの結婚のことでも萬事相談を受けたお方で、良く知つてゐる方でした。すると御主人は早速奥さんを迎へて、「この奥さんのお陰です。」

奥さんは些かテレ氣味で、隣りに腰掛けられました。するとその御主人はまた集られた校長や村長達に、自分がかかる宗教的な講演會

を催すのも、社會に對する遣り方の變つたのも、皆な奥さんのお陰で、毎日奥さんに感謝してをる、と云はれてゐました。

その後、その方と親しくして、始めてそのお宅に講話のために行きました。主人は多くの人々にも附近の先生方にも、信仰の大切なこと、信仰が無くては本當の業務が成り立たないことを語りつゝ、それは全く奥さんを通して得た教へのお陰である、と語られました。が、又、奥さんが遅く起きることなどを感心せぬと云ふことでした。

奥さんはそれでも六時ですからあんまり遅くありません。主人は僕は夜早く寝る代り、早く起きます、奥さんがもつと早く起きても良いと思ふが、その代り奥さんは、何時

までも家中を整理してをりますから、遅く起きててもそんなに不足は云へません。

近頃また、その家へ行きましたら、主人は「奥さんが相變らず、六時迄寝てゐますが、それはまあよろしい、色々意見を云ひますが、それもよろしいが、一家のことは結局、纏まりがつかねばならぬ。奥さんの意見に就ても反省はするが、決る時には同意せねば困る。」

直ぐその言葉の下で奥さんは「色々のことがあります、小供の教育に就て何事も不注意にして置け、と云ひますが、心配でたまりませぬ。私の注意して置いたことは逆に留守の時に子供をおだてゝ、私のすることに反對をやらせると云ふことがあります。」と目前で御夫婦の喧嘩が始まりました。私は奥さんの細かな注文も必要だが、夫の大まかなことも大切である、が、結局兩方が一つでなければ子供が間違つて、兩方が同じ

庭 家 を 明 る す

庭家と明を 作る

信仰に立たれるのだから、一寸は各々の意見が違つて食ひ違ふやうでも、その根本に一つで行くことが出来ればよろしからう。

御主人は色と兩者の性格が、考へ方が細いと大きいと、一つ一つ反對になつてゐることを云つて、それが仲良く和合もし、ことを運んで行く良い道だらうと、大笑ひで終りました。

斯く云ふ奥さんは、始めその方に結婚したが、あまりおとなしいので離縁になつた。後に來た方が頗る強い方で、舅夫婦をやりこめる等、遂に老夫婦は別居した。後に老人等は先きの嫁の優しく良くして呉れたことが思ひ出されて、尙獨身であるその方を老後の給仕に求めた。事情が變つて居るから相談があつたが、素直な心のまゝにするがよいと云ふので老人の望に従ひ段々良く仕へて老人は満足感謝の中にこの世を経へられた。

當時信を求めて私のところへ來られた爲に何處にも佛は光と力とを興へて下さる、その日の行く道と仕事とに全幅の捧げをして行けばよろしいと話して置きました。その氣持が離縁した舅姑に非常に満足に興へた力であつたらしい。離縁した嫁に世話にならうとする舅姑も妙なことであるが、その親を世話された主人は深く感ずるところあつて、後の妻を去つて、その人の後縁を求めました。

その夫人は、關係者の眞心、熱心は諒とするが、出たり入つたり、定らざるが如く、また第二夫人には子供が出來てゐたことであり自分が再縁することは財産目當てもあるやうに思はれること初をもつて躊躇せられた。が既に第二夫人も去られ、初縁からかゝる試験の後に、一切を清算して建直し度いと云ふことなれば再縁もよからう。財産云々は目を付けねばよろしい。道は幾何でもあると云ふことで、それ等の關係や財物を離れた氣持で如來の御心の中に許された新しい縁談が成立した。

我儘で強い一方であつた夫は、愛と理解と讓合ひとに目醒め、夫人はまた少くとも信じて得た位ひの力を家庭に業務に先妻の子供の教育に捧げやうと云ふ決心で、幾何もなく、その業務關係の人々が共に明るい信仰に動くやうになり、その財産も擧げて社會の奉仕に用ひられるやうになり、そこに新しい家と世界が開かれかゝつてゐる。

人間のことだから、これからも色々なことが出て來る事であろうが、互ひにその心を打あけて、而も等しく如來の御力の上に一致すること求めて行けば、必ず如何なるうねりや、曲りの中にも明るい道が開かれる。言ひ合ふ中にも、互ひに感謝し合ひ、喜び合ふ美しさがある。この美しい夫婦の力が直接の事業關係に輝くばかりでなく、五年十年經つて亡き後までの二人を輝かすやうにと念じておることでもあります。

古川柳と夏さまぐ

代田 重雄

暑くてどうしやうもない吾々凡夫の夏の世界を、江戸時代の古川柳がさまざまに眺めて、面白く諷刺してゐる。

夏の圓熟した自然や景物には、何か江戸情緒的な懐かしいものがある。蓋しこの小僧いほど巧妙な川柳句を一見すると、暑さも忽ち忘れてしまふ。

「世に倦いて剃れば夜に蚊蠅に蠅」といふ僧侶を諷した古川柳があるが、夏いちばん困るのはこの蚊である。耳許へ来てブーンと鳴く聲を聞いただけでも、暑さをおぼえる。

鼻唄で蚊は食ひ逃げをしてあるさ

人の血を思ふ存分に吸ひ取つて、ブーンと飛び去るその憎さ。

ちつとしてゐなと額の蚊を殺し結局蚊に逃げられて、額をたゞくのが關の山。

蚊は逃がしたがそツ頬は張倒し

はその姉妹句、こんなありさうな平凡な事でも川柳子は仲々見のがさない。

女房は蚊張を限りの殺生し

さんぐに蚊にいちめられた上く、蚊帳を吊つて中へ入る。安心してウト／＼とすると耳許でブーン、畜生ッ、女房は柳眉を逆立つて、可愛い、吾が子のために蚊を殺生しなければならぬ。御用心く。

蚊に喰はれたと恨みの數の内



腹が大きい?

『君は痩せたいと云つてゐるが、なんならゴルフでもやつたらどうだい。』
『僕も一度やつて見たが、あれはだめだ。僕の見える所へボールを置くくと打てないんだ。で、僕の打てる所へ置くと、ボールが見えないんだよ。』

正しき計算

先生『次郎君、六と四をたしたら幾つになるね』

次郎『へしばらく考へた後』八つです。』

先生『違ふー考へ直して見ろ!』

夏の夜の逢引。待つ身の辛さに蚊はお構ひなく攻めたてる。つひに蚊に喰はれたも恨みつらみの口説の種となる。

起きて見つ寝て見つ蚊張を

あしたうけ

質に曲げた蚊帳。この句は加賀の千代女の有名な俳句の文句取である。蓋し川柳子の皮肉にあつては三文の値打もない。

日中の灼けつくやうな暑さに、家の中にチツとしてゐると、涼風一過。そこに晝寝の座がもうけられる。

寝てゐても團扇のうごく親心

子を思ふやさしい親の心は、こんな場合にも變りがない。

よつぼどの間かと晝寝は

眼をこすり

一寸横になつたと思ふともう高いびき、フト眼がさめた。ハテ何時だらう。

大名に木蔭の晝寝うらやまれ

晝寝は家の中ばかりではない。外にはむしろ吾々の羨むべき自由な安樂境がある。ジー／＼と頭の上で喧しく啼く蟬の聲を、彼等はなつかしい搖籃の唄と聞いてゐるであらう。誰にも遠慮のない、木蔭の晝寝の安樂境こそ、何物にもまさる彼等のたのしい寂光淨土であらう。この柳句は複雑な人間の氣持をよく諷してゐて妙だ。

暑い夏の一日の勞苦も、一風呂サリと汗を落し、浴衣に寛いだ浴後の夕涼みに忽ち解消されてしまふ。何んともいはれぬ氣持がそこにある。

戸を閉めて外で留守する夕涼み

戸を閉めるとは大袈裟だが、これは家を留守にして一家總出の門涼み。

こゝに居りやすと娘の夕涼み

年頃の娘だけに親はその姿が見えないと心配する。「こゝに居りやす」娘は案外涼しい顔である。

次郎「十二です。」

先生「違ふ！ 十になるのだ。」

次郎「違つてらあ！ 五と五をた

して十になるんじゃないか。」

海上の悲劇

運轉手「ウイスキーが無くなりしました。船長、どうしませう？」

船長「入港だ！」

頼り無い

「どうも困つてゐるんだ。昨晚とう／＼花公に結婚を申込んだのだがね……」

「で、彼女はなんて云つたい？」

「それで弱つてゐるんだ、あいつがうんつて云つたかいやつて云つたが憶えてゐなんぞね」

心配ない

彼「貴女無しでどうして生きて行かれませう」

彼女「もつと安上りに行くわよ」

涼み臺天はどうしたとのといふ

涼み臺また始つた星の論

燦々と星のまたゝいてゐる銀河、際涯知れぬ夜の天界の神秘を、何人も不可思議に感じたにちがひない。無窮な宇宙の謎に對する人間の懷疑と憧憬、それはいつの時代にあつても變りがない。

一匹の螢でくづす門涼み

だがその騒ぎも、

涼み臺みんなたゝせて螢逃げ

が落ちた。命のほしいのは人間ばかりではない夏の生果として吾々の見のがせないものは西瓜である。その色といひ、味といひ、町を散歩してるとき飲料店のウィンドーの中にある、汁の滴るやうな西瓜の眞つ赤な断面を見るとたまらなく食欲をそゝられる。

西瓜は今日では何人も喜んで食べるが、ずつと昔は、西瓜は下賤な者の食べ物として一般に

はあまり見向きもしなかつた。新見正相といふ人の「八十翁昔話」に、

「西瓜といふものはお歴々も少身のものも食べることなく、唯道々辻番などで切賣りにしてゐたのを、下々のものや中間などが食べてゐた。町で食べる人はなく、女などはまして見向きもせず、寛文の頃から漸次食べるやうになり、それからだん／＼大身の人々大名なども食べ、結構な果物となつた」と述べてあるのを見ても知る事が出来る。

さてその結構な西瓜を、川柳子はどんな風に諷してゐるか。

口上がすむと西瓜の手をはなし

夏の夜の何様かの縁日に出た西瓜賣であらう。

西瓜賣はざまを開けてのぞかせる

たゞいて見たゞけでは素人には分らない。そこで一寸中をたち割つて見せて「ハイこの通り……」

古井戸へ西瓜飛び込む暑い事

用心第一

「貴女の御主人、街をつゝ切る時氣をつけてゐる？」

「えゝ、勿論よ。債權者のゐないのを見極める迄は、決して向ふ側へは渡りませんもの。」

察しられる

「今日は女房に、もうこれから貴様の尻になんぞ敷かれてゐないぞ！」

と云つてやつたよ。」

「そいつは大出来だ。ちやもう女房の前でふんぞり返つてゐられるつて譯だな。」

「ところが、いまだに身體中の痛みがとれないのでね。」

止むを得ぬ

「何んだか、隣りが馬鹿に騒がしいぢやないか？」

八百屋の店で買った西瓜はそのまゝすぐ食べるより、冷たい井戸水に冷やして置いてから食べるのと、一段と美味い。この柳句は芭蕉の有名な「古池や……」の句を聯想させるところが面白い。

夏場の食べ物に心太がある。昔はところてんは暑氣拂ひとして夏の旅行家には大切な食べ物だった。東海道では水口驛のところてんが第一の名物として知られてゐたことが舊記に見えてゐる。

ところてんひよろ／＼と

かしこまり

生きもののやうに捕へる心太

川柳は面白くこれを諷してゐる。

ところてん賣は一本半に呼び

喜田川守貞の「近世風俗志」に依ると、その呼び

び聲は「ところてんや、てんや。」とある。

杉の葉の中から酢が出醤油が出

杉の葉を挿した罐の中には、酢を入れた醤油が

入つてゐて、これをかけて食べる。ところてんに蜜をかけて食べる人があるが、あれは外道だ。心太はやつぱり酢醤油をかけて食べるところが身上である。これを食べると暑氣當りをしない。

子供達の弄ぶ花火、あれは夏の夜の涼みの點景だ。

火の消えた鼠を投げて笑はれる

小さい輪になつた鼠花火、早く手放さないと手許でシユウ、ポカン！と破裂するからあぶない。憶病風に吹かれて素早く手放したが合憎火が點いてない。

手牡丹の根ばかり残る涼み臺

手牡丹とは、線香花火の一種。

小便のあとで屁をひる安花火

シユー、ブツ！これは鼠花火の事。

花火賣十五以上はにくらしい

花火を弄ぶのは精々十二三位までである。

『隣の奴が獨りごとを云つてゐるのさ。』

『獨りごとなら、もつと靜かにやれば良いのに。』

『仕方ないさ。奴は孽だもの。』

萬年補缺

『俺は卅年間もベンチに座つてゐたよ』

『はて君は何をやつてゐたんだ。裁判官かね』

『うんにや、野球選手さ。』

プレゼント

『で、君は妻君に家庭の平和と幸福を齎す賜物をしようと決心したと云ふのだね。一體それはどんなものだ』

『左様、僕は女房に里までの汽車の切符を買つてやることにきめたのさ』



迷信を克服するもの

眞 野 正 順

さへられぬ光もあるををしなべて

へだて顔なる朝がすみかな

(法然上人)

この頃は「宗教が復興して来た」といふ感じを皆んな社會の人が懷いてゐるやうである。すると妙なもので、今まで宗教に就て無頓着であつた人達までも「自分も少し宗教に就て理解を持ちたい」といふ氣になる。でないと、何か社會の大勢からひとり取残されてゆくやうな氣がするからである。

ところが宗教といへば、今迄のあり來りの常識によると神佛とか云ふ何か、眼に見えぬ大きな靈力を信ずることで、それを信ずるやうになると、普通人とは變りどころが出て

來て、その信心のお蔭で病氣が治つたり、當然遭ふべき災難を免れたりする。

○

こんな風に、いま、宗教を考へてゐる人は社會に、多いやうである。ところがこの眼に見えぬ靈力と云つたやうなものはなか／＼分りにくく、握みにくいものである。

そこで、近頃は、この靈力を一身に現はしてゐるといふ教主様と云ふ者が出て來て、大勢の信者の病氣災難を其一身にふりかへて代理して下さつたり、或は、眼の前で其靈力

を使つて病氣を軽くしたりしてくれるといふ者が現はれて來た。さうなると、如何にも手取り早く、わかりのいゝ生きた宗教であるかの如く思はれて、すぐそれに吸ひつけられる。

いま、この社會の一部におどろくべき勢力で迷信が醗酵しつゝあるのは、こんな事情による。

○

然し、こんな宗教はすべて迷信である。人生を腐らせてしまはうとも、決して崇く眞實に人間を生かしてゆくことではない。なぜならばかゝるものは「眞實の生命」といふ美名でカムフラージしては居ても實は、人々の醜い利己の慾望を刺戟しそれを緩つてゆくものに外ならないからである。この世の中で自分だけひとり特別な靈力のお蔭で災難にも遭はず幸福になつて行かうとする蟲のいゝ、利己の慾望、それが根になつて信仰と云ふ氣持になつてゐる。それは、宗教ではなくて、實は醜い利己心が露骨な空想をしてゐるに過ぎぬのである。

○

この頃のやうに社會に變動が多く、共產主義が現はれて、人類進歩の方向は根底から轉換されてくるかのやうに主張されたかと思ふと、また形勢が急に變化して世界各國は國際協調を止めて、急に國境を高くして互にイガミ合ひはじめる。一時は世界から閉め出しを喰つたかのやうに見えた日本がどうしたものか逆にメキ／＼と頭をあげてくる。さうして今迄あれほど崇拜された西洋文化が、一途に捨てられて日本精神といふものが切りと高揚されてくる。——と云ふ風に後から／＼と變動が續いて來ると、人は次第に自分の周圍に、手頼りになる確かなものが無くなつて來たかのやうに感ずる。さうなると人は先づ何より先きに、自分だけの安全を考へるやうになる。妙なもので、社會が不安になると、何時でも人は、自分だけの幸福は守りたいと云ふ氣分が強くなる。

○

その心のスキにつけ込んで來たのが、この似而非宗教である。それはこゝに靈力を説いて、それにすがりさへすれば、そのお蔭で信者だけは幸福になると云ふ。すると、既

に今迄の生活に自信を失つてゐた人達は、平常の理知も忘れて、ふら／＼とその迷信にとびつく。

○

ところが、かゝるものは、實は、自分の蠱のいゝ利己慾が我れと自ら自己の理知を打こはしてゆく事に外ならないのである。だから一度、人間は自己の正しい理知の框を外して、かうしたものを信じはじめると、それから次第に何も彼も、この見えざる靈力に手頼らなければ安心してゐられなくなつてくる。自己の身邊の事件の移りゆき、それは一としてこの靈力の息のかゝらぬものはなく、常に何かしら目に見えぬ力で包圍されてゐるかのやうに感ぜられ、絶えずそれを祈つたり封じたりしてゐないと、安心が出来ないやうになる。——つまり、靈力の領域がだん／＼と擴がつて行つて、遂に自分の全部をつゝんでしまふのである。

○

法然上人の出られた頃の社會が、丁度こんな風であつたその頃平安朝の末期には、現に眼前に靈力を現はして見せるものほど、本當の信ぜられる宗教だ、と、云ふ考へが人

々に満ちてゐた。そこで印度や支那からさまざまの怪奇な鬼神が輸入されて、盛んに護摩を燃やしたり、香をいぶしたりして、しきりに御祈禱御修法をやつたものである。さうなると、だん／＼この世の中には草々の目に見えぬ惡鬼善靈が充滿してゐるかのやうな氣分になつてくる。

あの平安朝末期の文學の特長たる陰鬱怪奇な「物の怪」の不安は全くその爲であつた。風の吹くにつれ、戸の外れたことにつれ、平安人士は、一つ一つ其背後の靈異の光つた眼を思つて、慄へ戦いてゐたのであつた。

○

——迷信は泥沼のやうなものである。一度、踏み入れると、一足ごとに、深くなつて、遂に、その全身を没してしまふ。

○

然し宗教は、このやうに自分の勝手な慾望の成就を、神佛に注文つける事では斷じてない。こんな事が出来るものと空想してゐると、一時は自分だけは「いゝ子」になつたやうな氣がして、一種の安堵が得られたやうな氣がする

が、さうしてゐる内に、だん／＼一も二も、神佛の靈力を待たねばならぬやうな氣がして來て、自分で何一つ定めて進んでゆく決意が無くなり、まるで憑かれたものゝやうに自分が空っぽになつてしまふ。自分で自分の運命を忍受し、それを切り拓くために活動してゆくと云ふ、あの人間本來の強い莊快なる生命が、其人から消失せてしまふ。つまり天授の莊嚴なる生命の意義を、その人は喪つて幻のやうなものゝ奴隸になつてしまふのである。

のみならず、このやうに、人々が銘々、神佛の「いゝ子」になつたやうな氣持で、勝手に秘かに靈力を崇め自分の要求を祈つてゐるとその社會は必然、連絡を失つて内面的に支離滅裂になつてしまひ、ほんとうに、一丸となつて眞の生命にみなぎつた社會はこの國から消えてなくなつてしまふ。あの平安末期の腐敗した公卿社會がまた、そのよい例である。

○

現在この社會に蔓延しつゝある「新興宗教」と名くる怪しげな迷信が、この國の人達に及ぼす將來の惡影響は思へ

ば怖ろしいものである。かうしてゐる内に、現在、宇内に雄飛しつゝある輝かしき國民の銳氣を内に腐らし、中外に誇とする一致團結の尊き民族性を、その内部から崩壊せしめてゆく。

○

ほんとうの宗教は、利己の迷信を遂げるために靈力に縋つてゆくことではない。それとは逆に、却てこの利己の欲望を根底から覆へし、新たなるより眞實の生活を樹立て、ゆくことなのである。かう云つたら、普通人は愕くであらう。然し、本當の生命を得るためには、是非かうしなければならぬのである。なぜならば、いま、この自分といふものを中心に立てゝ生きてゐるこの生活は、まだ本當の生命になつてゐないからである。

ほんとうに生きる時は、人は常に、この自己から超えてゐる事業に白熱してゐる時も、眞に公衆の爲に働くときも、我れと我れ自ら火花を發してゐるやうに眞に生きた時には、人は必ず自己を忘れ、自己を超え出で、より大きな生命によつて生きてゐる。

さうして、この時こそ、眞に生甲斐のある、觸るれば鳴るとき、颯爽たる生命に入つてゐるのだ。だから古人も「己れを守るものは、却て死し、己れを捨つるもの却て、生命を得」と教へたのである。

○

こゝに在るところの自己は、例へて云へば、水泳の跳込臺の如きものである。人は銘々自己の與へられた境遇・運命の立場から、一躍高く跳んで、この眞の颯爽たる生命の躍動裡に入る。そこに人生の意義があり、また眞の生活が、味はれるのである。それを何時迄も自己と云ふ跳込臺に、からみついて右顧左眄してゐるならば、人生は自ら乾枯び、果ては腐つてしまふ。

我國古來の生命の眞髓は、まつたくこの、「死んで生きる」道にある。さればこそ、この矮少なる體軀をもてる黄色民族の中に、颯爽として、雄者を挫く力が現はれ、あらゆる世界文化を倦くことなく吸収し同化し、乗り越え、進んで止まぬ偉大なる生命力が現はれて來たのだ。また、公衆

の危難に際して、先きを競ふて、自らの身を献げ生命を捨てんとする美風が現はれ、民族がこゝに玲瓏乎として玉の如く完全なる一致團結を示すことが出來たのである。

○

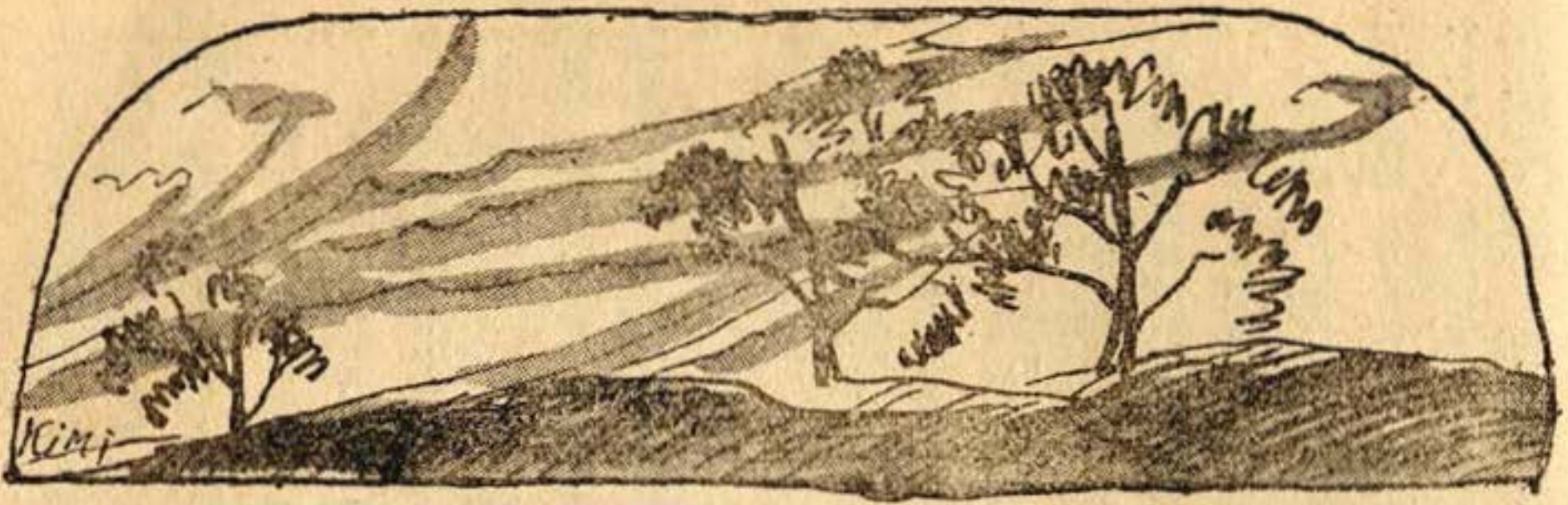
與へられたるまゝの自己を「愚痴」を見捨て、ひたすら、崇き眞實の生命へと「念佛」してゆく、法然上人の道の意義はこゝに存する。それは、かの昏濁せる平安末期の迷妄を拂つて、新しく雄渾なる鎌倉新時代を拓いた根本動力であつたが、やがて今や、迷信腐敗に近づかんとする現代人士を警覺して、東洋眞實の大路にひき戻してくる巨燈でなくてはならぬ。

X

X

X

眞實の日本を建設するために東洋古來の眞實の大路の内容はもつと深く分析されて來ねばならぬ。さうすればこの一見、單純素朴なる念佛の道がやがてこの大路を開闢してゆく、眞實の實踐であつた事が、次第に明かとなつてくるであらう。



流 雲

南 一 郎

『皆さん』

井上さんはさう呼びかけた。呼びかけ乍ら、今から自分の話さうとする話の内容を思つて、早くも目頭のむづがゆくなるのを感じるのであつた。

『今日の話はねエ……あまり聲高に話したくない話、聲高に話しては話にならぬ話だから、皆さん、もつと私の近くに寄つて来て下さい』

『今日の僕の話、かひつまんで云へば、かう云ふ風にも云へるかと思ひます。……』

「人生で、最も架空的なものは、數學の正しい解答である」と。驚いてはいけません。

又云へば、「人生で最も警戒さるべきは、道徳の正しい批判である」と。では、人生は何に基準するか？ 人生の眞實の姿はどんなものか、それは、あの大空に湧き立つ雲の形體を決定するよりも困難である。正しさも乃至嬉しさも、或は罪惡も又は冤罪も、遂に暗から暗に流轉して、酬いも無く、又、詞も受けず、永遠にその最後の責任を解消しないとも限らぬ。が、それでも誠に以て致し方も無いのである。大地の底深くには、多分の藥物を含んだ温かい靈泉が滾々として湧いて居るのであらうけれども、その總てが、必ずしも地表にまで吹き出でて、人の歡びに奉仕するとは限らぬ。少くとも我々、今生の感知の中に這入つて來ない種々様々のものが、澤山、山のかなた、地の奥底で、生れ且つ滅びて行つて居ることであらうと思ふ。こゝに集つた皆さん

は、もう三十と云ふ年を越えて来た方々もあり——三四人、顔を見あはせるとにこつと笑ふ。井上先生は平氣でつゞける——皆、女子大學や専門學校の卒業生、或はそれ以上の教養を積んだ方々ばかりで、本當に「人生」と云ふものに、身を致し、心をひそめ、鍊つて来た方々だ。それでも、私の云ふことは、或は、奇矯に思はれるかもしれないね。……」

井上先生は、こゝで、も一度皆を見まわした。高くすぎて行く松籟を伴奏するかのやうに、窓邊の笹が、サラサラと鳴つた。いつもの講義とすつかり違つて、用語まで優しい今日の井上先生、彼女達は不思議にさへ思つて見なほすのであつた。

「先生の顔は妙にほてつてゐるわよ」

さう云ふ園子自身が、何かしら甘ずつばいやうな心のふくらみを感じるのであつた。

「今日の話は少し古い。××年間と云へば、今から約百五十年程も前のことですが、話の舞臺は北九州、筑前と肥前の國境を、西へ西へと延びて居るのが背振山脈で、それが、唐津灣に落ちようとして一寸、かう振りかへつて居るやうなのが獅子舞岳、すぐその近くでこの獅子舞岳に應へて居るやうな、一段と高い山が雷山です。實測でこそ背振よりも低いのが、群山を統べて居るその風格は、仰ぎみる者をして、一種のいやちこさを感じしめる程でありました。この雷山の麓に、長野と云ふ村があつて、米はよいし、竹は出るし、富の

程度も高からず低からず、平和と云ひたてるもおかしい位な平和な村でありました。只一つ、僅かにその平和を亂して居るものがありとすれば、それはこの三四年、村端に旅から着いた母と子で、何となく氣品も優れて居るまゝに、誰



一人深くとがめだてするでも無く、何時ともなしに村人にまじつてしまつたのではあつたが、その母の、まだ初々しく、深い教養が築き上げた美しさは、いくら月日が流れても、村人に不斷の話材——と云ふよりも、頭の一角に常夜燈を灯したやうに、ほのかな關心を消して仕舞ふことが出来なかつた。

さき程話しました雷山の中腹に、昔開かれた靈場があつて、そこに四空上人と云ふ、もうかれこれ五十に近い立派な上人が居られた。これが丁度、かの渡邊海旭先生の『誦經不管歲華流』と云ふよりのな生活で、餘暇があれば、鉄をとつて峠に登り、十年一日の如く肥筑兩國を結ぶ、道路の開闢に餘念が無かつた。

こゝで私が、想像したり、技巧的に云へば云へないことは無く、話の筋を一通り、物語風に解りやすくすることも易々たるところであるが、まあ、それは止めておきませう。この上人がですね。不圖したことから、この長野の村に下りて来て、こゝの大庄屋の書院で毎月十四日にお話をして下さる習慣がつき、始めのうちは、先程話した母と子の、母の方が御給仕等を仰つかり、後には子の直三郎と云ふのがこの母に代つた。

『よい子じや、わしがもらつて小僧に仕樣かなア』
等と云つた時、庄屋はいつも答へた。

『さうでもして頂きますれば、定めて彼等も本望と存じまする』
が、上人は、母に向つて、ついぞ、あらためてこれを提案するこ

とも無く、母も亦、時にそれを願ひ出でると云ふ風も無く、だんだん月日は経つて行つた。

話がこゝまで進んだ時、聴講者の一人が云つた。

『先生』

『何ですか』

『今日はお晝をお宅で御すましになりますか？』

『さうませうか』

『さうして下さい。(小聲で)せつちやんが嬉しがりますから』

『やな、よつちやん！』

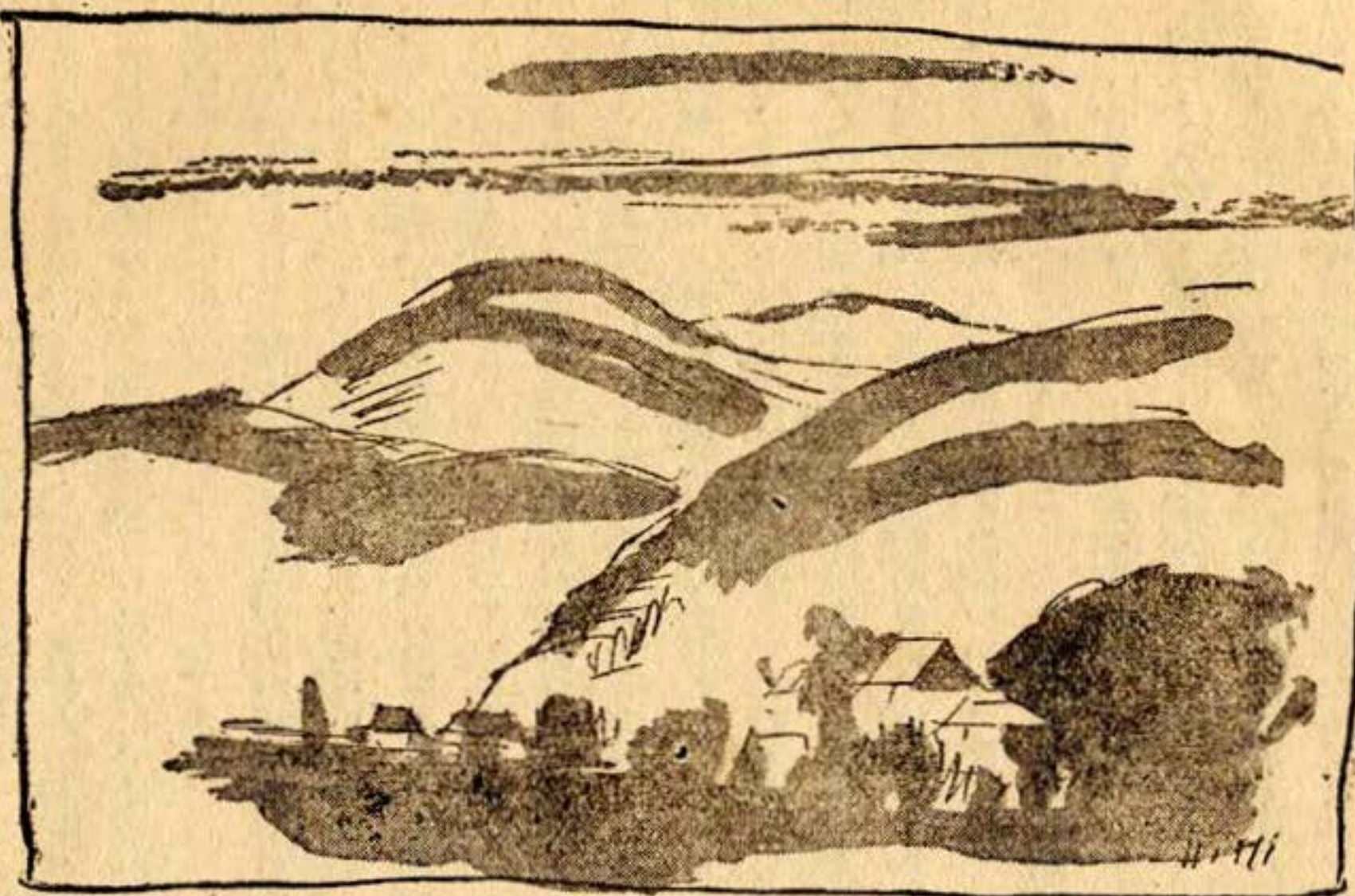
お花畑を、薫風がなぶつて行くやうに、つゞましやかな微笑が一堂に揺らぐ。

『さア話を續けませう』

濫い張のある聲が何なく三十幾人の心をずん引きたてて行く。

『水の流れるやうな、たんたんとした私の話ではあるが、言葉を一つこゝに差し挿むならば、それは、だから、この上人が村に下りて来て御法話をされることになつたのは、この母と子が、この村の住人となつたことよりも、やや後のことであると云ふことです。

今まで、田を耕すこと、竹を山から伐り出すこと以外には、正月に着物を着替へ、五月に田植歌を歌ひ、お盆に踊り、秋祭に村芝居でもかゝれば上々のことで、その他には、笑ふことはおろか、言葉さへも、二つ三つでこと足りたやうな村に、この御上人様のお話が



初まつ
たこと
は、何
となく
心を揺
り動か
すやう
な、ど
こか様
られて
居るや
うな、
新しい
叔父さ
んか、
伯母さ
んかを
索し出
したよ

うな、得も云はれぬ歡喜が、しみじみと味はれるのであつた。この御法話を頂く十四日のために働いて居ると云つても過言で無く、村

人の顔は、だんだん生き生きと輝くやうにさへ思はれた。

『今日は十日だのう』

『さうとも、あとたつた三日だア……』

口を開けば村人は、すべて十四日の話をして居つた。

かう云ふ法悦が、この村にどの位の闊達いたであらうか、次のやうなことで、この村の新しい歡喜は、否、昔からの平和は、大地を引き裂く大地震のやうに、根ツから動揺しはじめたのであつた。

それは、村一番の美しい、しづと云ふ十七娘が、父の無い妊娠をして仕舞つたことであつた

聴講者が、小さい溜息をつき終るのを待つてをるかのやうに、井上先生は次の言葉をゆつくりと續けて行つた。

『安愚は最も善き平和の道づれであり、平和は安愚によつて最も善く保證される。人が、一段の開發を規圖し、實踐する時には、殘念なことではあるが、その目的とは全く反對な悪い結果を現はす幾分の犠牲者を生むことの記録は、古來改められることが出来ないやうである。その躍進の速力が早ければ早い程、激しければ激しい程、その犠牲者の痛手も深く且つ數も多いのである』

『百年一日のやうな平和の村人の顔が、法悦に輝くのみで無く、更に深い苦惱の變までも彫みつけられたことは、人生の全貌を残り無く知らめしやうとする、より親切な天の配劑であつたかもしれないが、この親切は、この試験の無い村にあまりにも相繼いで現はれて

行つた。四空上人の爲めに乗馬を贈ると云ふことになつて、助三郎と利助が競ひ、安助の家に最も利害關係の深い曲川の橋が、洪水も無いのに流され、徳太郎の竹山が荒され、甚三郎の鶏が盗まれ、市右衛門の嫁女が實家から歸つて來なかつた。村人の心には、彼等の知ると知らざるとの別なく、感ぜざるとを論ぜず、一つのレゾオリューションが捲き起つたのであつた。

私はこゝで、それ等の一一を語る繁鎖を避けませう。こうした潑刺とした生活最初の大犠牲者として、遂に直三郎が、この村始まつて以來の極刑、十年の『村追ひ』を言ひ渡されたと云ふことを云つて、私はこの話の第一幕をおろしませう。

井上先生は、珍らしく、こゝで一ぱいの水を飲んだ。

『ぢやお當番はこゝで失禮して下さい』

幹事らしい先輩の婦人がさう云つた。

『直三郎のお母さんね』

『妬ける？』

『ああ、四空上人、直三郎のお母さんが好きだつたの？』

『何だか、つひ、そんな氣で聞いたわ』

『この人の耳ツたら、何でもそんな風に聞きたがるのね』

『さうかしら？』

井上先生は一寸時計を見た。

『二幕目を大急ぎで開けませう』

『直三郎が村を追はれる時、その母は、そんなに深くは歎かなかつた。それは、直三郎が、罪を犯すやうなものでないことを、あまりにもよく知つて居たからであつた。やがて眞の平和攪亂者が發見せられて、直三郎の歸村が叶へられる事も、そんなに遠いことでは無いと信じて居たから。』

『お前にはまだ色々話しておきたいことがある。が、も一度お前がわたしの側に歸つて來てくれる時まで、わたしはそれを待つて居よう。わたしも丈夫に暮して居る程に、お前もどうぞ氣をつけて暮して下され、何にも辯解がましいこと云ふ必要は無い。可愛い、子には旅させよ』と昔から云つてあるが、かう云ふ機でもなければお前一人で旅することも出來なからう。出來る限り諸國巡禮をして、も一度是非こゝに歸つて下され、わたしは、どうしても此處で息を引きとりたい。願くばお前も、あの雷山の御上人様のやうになつて、わたしにも一度會ひに來ていただきたい。』

x

x

x

直三郎は、忘れもせず、十年の放浪を終へて、筑前は怡土郡、長野の村に歸つて來た。もうこゝからは見える筈だと思つても、彼の家の母が住む家を見出すことが出來なかつた。とどろく胸をさしおさへて彼は、その前まで行つた。昔の夢はまざまざとかへつて來るものを、彼の家の母住みたまふ家は遂に現には無かつた。庄屋に行つて聞いて見た。僅かに十年ではあつたが、こゝもすでに代が

替つて居た。

『お、直三郎か、よく歸つて來た。あゝお前さんの母親が生きて居たらね。……』

『ではやつぱり死んだんですか』

『あゝ、しかも、お前さんを見送つた日に死んだんだよ、お前さんが、眞晝間、出かけたりするもんだから、可愛想に、お前さんの姿を見送るために、あの裏山に登つたと思はれる。山から歸りの利助どんが見つけてね。もうその利助どんが見つけた時は、手のつけようも無く、全くつめなくなつてしまつて居たさうで、そのまゝ、そこにいけてあるよ。そら、お前さんの屋敷の上の方、利助どんのうちの裏の方だ。しかもまア、せめてものことだが、どう云ふことであつたか、今まで村ではあれ程の盛んなお葬があつたことが無いと云ふ位、立派なお葬が出来たよ。長徳寺の上人は云ふもさらなり、雷山の上人様まで特に御回向下さつて、さう云つちやおかしいが、うちのおやぢの葬式よりも見事だつた。……』

『それから、これは拙者から特に御詫するが、その時、お前さんはどこに居なさつたか知らぬが、去年の秋になり口、大風で。うとうとお前さんの家は倒れてしまつて、何とかお前さんが歸へるまでは無事にしておきたいと思つて居たが、それ、そんなわけで、まアこれは何とも致し方が無い。中のものは、そつくりそのまゝ、わしの方で與つてあるから……』

『色々難有う存じました。とりあへずお墓参りをして参ります』

『あゝそれがよろしい。そのうちに、支度をさせておこうから、今日はまア、ゆつくり、こゝで休みなされ……』

と云ふやうなわけで、直三郎は母の墓を訊ねて行きました。丁度十年前の今月今日、思へば時刻までが同じ頃ほひ。なる程、下の道を行く人影が、はつきりと見出される。親一人子一人の、どんな哀切な別れであつたらうか、あんなに元氣なことを云つて居たのに……等と思ひ乍ら、直三郎は漸くにして一基の墓標にまで辿りついた、誰が植ゑてくれたか、かなり大きな松の下に、柴などまで添へてあつて、永遠に眠る人の淨らか安けさが、充分保たれてをつた。直三郎は、靜かに麓を見てをつた。いつの間にか、自分が母になつて居た。若し口を開けば、『お母さん』と云ふよりも、『直や』と、よびかけさうな氣がしてならなかつた。何と思つたのか、彼は庄屋さんのうちに下りて行くかはりに、どんだん上の方に登つて行つた。『私は實は、——井上先生はちよつと、調子を替へて——この同じ長野村の生れであり乍ら、永い間、これ以上のことを知らなかつた。が、友人が、不思議な廻りあわせで、今その私の村の上、遙かにのぞまれる雷山の靈場、靈雲寺の御住持になりました、昨日、長い長い手紙を呉れたのです。私は今からその手紙を讀んで、今日の話の最後を飾りたいと思ひます。』

「——かねて學兄より承つて居た事もあるので、極力、あの話を

調べあげたら、これ誠に一篇の奇しき物語で、拙ない乍ら、筋道だけでも學兄に傳へざるを得ない氣になつたのである。四空上人はとうなつたか。それが第一の調査であつた。何故なら、この歴代の墓所に、四空上人の墓が無いのである。が、これは小生の友人で、例の名隨筆家、越後柏崎出身の石黒敬七君、生來の考古癖が四空上人最後の小庵を訊ね出して教へてくれた。それは實は、北海の波荒き柏崎海岸の四空庵と云ふので、今は事跡も無く、只、特に氣をつくれば、その礎石らしい自然石の幾何かを見出すにすぎぬと云ふことであるが、これに依つて、四空上人が晩年を、諸國巡錫に出られたと云ふ證據を更に確實にしたわけである。これに次で、嬉しかつたのは、四空上人は、あまり揮毫をされないのに、熊本縣阿蘇郡山鹿村に、親子地藏尊があり、それが、上人の筆になつたことが最近解つた。思ふに、だから、上人は、自分の志した、肥筑兩國を結ぶ峠の道——今では縣道——が出来上つて、上人自身が、最初の人として、これを越えて行つたのではないか？ 自分はここの第八十六世であるが、四空上人の次に、この住持となつた八十二世玄空上人までの間があまり永すぎるが、その間の無名の上人こそ、必ず直三郎の後半世であらうと思ふ。何故ならこの無名の上人が、一日一杉の誓願を立てて、峠の道の上下に、杉苗を植ゑられたのであるが、その入寂の月日と、杉の數とが、丁度、直三郎歸村の日に（即ち追放の日より全十年後）大凡誤り無く合致するのである。即ち、

彼直三郎は、母の墓參をすますと其儘、この雷山の靈場に登つて、一生奉仕の生活を初めたのであるが、これより先、四空上人は早くも此處を旅だつたらしく、二人が相擁して劇的シーンを作つたようなことは残念乍ら考へられない。只、これは、柄にも無い小生の想像であるが、かの村一番の美し女、おしづが生んだ父無し子が、若し第八十二世玄空上人であられたら、それは小生よりも學兄がさぞ歡ぶことであらう。尤もこの場合は、冤罪を蒙つた直三郎よりも、彼が青春を語る當の責任者である方が面白く、更に云ふならば、四空上人こそ岡山の城下を追はれた池上鐵之丞の落飾の姿であり、直三郎の母が篠女であるならば、これ又實に『親子三代地藏由來の記』となるのではあるが、直三郎の母は、さだ女と云つたとか、この場合、村の古老の記憶こそ、氣に懸ることではあるのだ。學兄よ、學兄がこの手紙を讀み乍ら、むづむづして小生に云ひたいことがあるに違ひ無い。實はそれも調べたのだ。だが、そこからは何の手がかりも得られなかつた。かりに、玄空上人が直三郎の太郎でなかつたにしても、『怨愛の彼方』で面白く、日に繁り行く杉を相手に、都座遙かに、我れ若き靈場の御維持は、この頃、二人の小僧に古の聖の事蹟などと語り乍ら、決つて愚かしい孤獨等に陥つては居ないから御安心下さい。この事に就て、學兄の新しい想像や、調査の寸法等御示し下されば幸甚です。……』

『では、時間が來たやうですから、今日のお話はこれまでに……』



一

武州岩槻城——主は扇ヶ谷管領家の執職、備中守太田左金吾資長。入道して道灌持資。

城内奥深き城主資長の寢室の夜。

生だるい七月二十三日の盛夏ゆゑ、資長の褥は汗ばんでゐた。

關八州の平原草木も眠る丑滿時、彼は寢返りをうつために、二重

瞼の眼を開いた。

(はてな?——)

何を思つたか、彼は常人より朶の長い耳を疊に押しつけた。

スルスルスル……。數十間離れてゐるらしい廊下に忍ぶ足音。
(曲者かな。)
枕元の刀をチラリと見ただけで、其儘寢てしまつた。——數分の後。

「曲者ツ!」

宿直の侍の叫び聲、倒れる音、襖を蹴る音が、夜の靜寂を破つてこだました。資長の寢所にも無論其の餘韻が聞えた。然し彼は高野で寢てゐた。更に數分の後、

「とつたア!」

聲と共に元の靜寂へ再び還つた。

淨、眞二宗を信じて入道した資長は、堅い佛に歸依する信念の爲、少しも動じなかつた。

翌朝。資長が起きると、家老太田垣一學が伺候した。其の時は既に資長は、茶の薄い帷子を着てゐた。

「殿、昨夜曲者が潜入致しました。」

と、一學が報告すると、

「ホ、ウ。左様か——。」

一面晝行燈式の彼は、昨夜自分が眞先に覺つて置きながら、さも驚いた様な顔をした。

「して、誰が捕へたかな？」

「近侍小千谷浪江にござります。」

「ホウ、天晴れぢや、何か賞を取らせい。」

「は、それについて殿、彼奴は若い者でござりました。足輕取締役

藤岡市衛の娘、千夜との婚姻を許して下さいと、云ふので。」

「ム、許してやれ。儂が月下氷人を致さう。」

「は、彼奴も喜ぶ事でござりませう。」

此の君の粹人振りに一學は、我事の如く喜んだ。然し資長の面に一抹の淋しさが現はれたのは、少しも氣づかなかつた。

資長は早くから妻に死別した。千夜は家中一の美女だつた——然

し彼は既に公務に追はれて五十五歳であつた。望まれぬ花だつた。

「して、曲者は放逐したらうな。」

「曲者は浪人だと申して白狀させぬが、多分山内管領家の刺客でござりませう。管領家は當家の主君も同様、直ちに放逐致しました。」

此の君に此の臣あり、相當の人物の家老である。平井城（上州）の山内管領家上杉顯定が、扇ヶ谷家の手足たる、太田資長を排斥せんとするのは、資長も熟知の事實であつた。

然し惡辣な顯定は、策將長尾景春を迎聘してから益々其惡辣振を募らせ、資長を相州平井城扇ヶ谷家の上杉定政に讒誣し、それが略々成功しつゝあるが、彼資長はそれを夢にも知らなかつた。

元來資長は定政の父、上杉持朝の信任厚く、江戸、河越等の八城を、彼の大城砦觀を以て築城し、八州の將士を悉く扇ヶ谷家に靡かせた功臣である。然し子の定政は、彼を厭ふ傾向があつた。

「良い天氣ぢや喃。茶でも飲んで行かぬか。」

資長は側の鐵瓶をとつて、茶を煎じ初めた。一學は主君の動作を

ぼんやり眺めて居た。

「儂と其方とは、主従の關係ではない。同じ扇ヶ谷家に仕へる家臣ぢや。だからまあ、兄弟分の積りで居てくれ。但し一大事の時は……」

資長は平生家臣等にこんな事を云つて居た。然し表面はともかく、内心益々信頼尊敬の念を起こさせるばかりだつた。

それに反して、兩公方、兩管領家の凡暴君は威張れば威張る程、嫌厭されて行つた。

資長は茶を注いで一學に勧めた。

「難有り御座ります。」

一學は茶碗を取上げた。茶は熱湯、茶碗は薄物、常人なれば、「熱ウー」と取落す所だが、老家老は平氣で、少し顔を顰め乍ら口中へ——。そして戰場を通過したやうな得意げを見せ、主意に叶うた様に主君の顔を見つめながら茶碗を返した。資長は受取つて、

「熱ウー！」

と、餘熱に驚いた。暫らく

して、

「哺一學。當世の大名の家へは何故薄物茶碗ばかり入れるのだらう。それに薄物は高價だ。」

「厚物は焼が容易で下品とされてゐます。薄物は名工の作なので、大名屋敷に流行つて



居ます。殊に當代隨一の祥瑞五郎太夫の作などは。」

と、説明顔で語り出すと、

「概して大名といふものは我儘なものだ。儼もその一人だが。そして入らざる所へ意地を出す。だから薄物茶碗などが流行り、熱湯を飲んで喜んで居る者が出てくる。それに反して百姓町人達は、便利で安價な厚物を使ふ。」

「然し殿、一度名匠の手にかかれば、岩をも通す名刀となる鐵よりも、燦然と輝く黄金の方が高價であるといふ例もあります。」

「さうだ。作製に骨が折れ、又世に少い物が高價になるが世情だ。がしかし、世に少い器量人が、扶持に離れて流浪してゐる者は澤山あるの。之は如何致したことであらう哺。」

「はつ。」一學は答へる事は出来なかつた。

「嗚呼。我をして十萬の石を與へしめれば、かゝる器量人を集め、忽ち關東を平ぐものを。」

資長は嘆息した。彼が岩槻城を中心にし

て、統治する地は、武州一圓五十二萬餘石であつた。然し實際彼の手に入る食祿は萬石足らずで、後は管領家の物であり、大場城へ送るのであつた。彼は扇ヶ谷の執職である地位に過ぎない。

「かゝるせち辛い世上だから、大名、公卿が下情に憧れて家出するのだ。……」

一學、こんな話は止めにし

やう、はッハハハハ……。時

に、越後の山内家の執職、長

尾爲信の伴がまた子を生んださうな。」

長尾爲信は、往時古河公方を破り、資長に對抗し得る唯一の山内家の勇將であつた。それだけに資長は此の好敵手が頼もしかつた。

「は、左様聞いて居ります。女ですか男ですか。良く生みますな。」

「ム。生む方が良い、男でも女でも戦國の世では生めば生む程良い。女などは、政略結婚でどし／＼嫁にやつてしまふ事が出来るか

らな。——養女迄してやる程だから。然し今度のは男ださうな。」



「えッ！」

「呼名は虎千代。本名輝虎、又の名景虎。どうぢや虎が出たらう。はッハ、……。」

「はッハ、……。」

「どえらい名だから豪傑になるだらう。」

其の時襖越しに近侍が手について、

「虎だッ。」とするとく云つた。

資長には妻の遺児、三人の男だけしかなくつた。そして彼は入道して、只管佛道を行じて來たのであつた。多勢の女と淫放な生活により、得たる多兒を利用する様な者でなかつた。

「長尾の孫に名を付けたさうだ教へやうか。」

「はい。」答へる一學に眼を大きく開いて、

「只今大場扇ヶ谷管領家から、殿へ即刻登城せいとお召しでございます。」

「さうか。」

近侍は去つて行つた。資長は一學に向ひ、

「一學どうしやうか。」

眼と眼が當惑を語る様にかち合つた。

「殿のお心は？」

「行く。」キツパリ云ひ切つた。

「は。お出でなさりませ。」

「一學ッ！ 何故留めぬ。」

「昨夜の曲者や、又近頃の世情から考へて見ますれば、行く事は危険な事だと思ひます。然し殿が行かねば、扇ヶ谷の上様に不忠になります。臣として、君に不忠を勧めたくは御座いません。」

雖て、此の老家老は去つて行つた。

（留めたら行くまい。と思つたが、あの男は利巧者だから留めぬ。

兩管領家の逼迫や、當主が儂を嫌つてゐるといふ事は、儂だつて知つてゐる。儂だつて人間だからまんざら命が惜しくない事もない。

——まるで火の中へ入る夏の蟲だからな。

然し一學の言分には理がある。「君に忠」さうだ。彼奴の言ふことが一般的な意味で本當なのだ。上へ對しては忠でなければならぬ。

譬へ殺されても、臣として節を持せねばならぬ。それが世間からの眼だ。言葉だ。……

資長！ お前は何を考へてゐる。今考へてゐるのは主を疑つてゐるのではないか。殺されるなど、主を疑つてはならぬ。信じたがよい。）

片言混り自分を警めた彼は、近侍を呼んで、
「即刻、大場城へ伺候する。供は十人、騎馬で行く。それから源六にも『久しぶりに父が相模へ連れて行く。』と傳へてくれ。」

「は、若殿も御一緒に——承知致しました。」

近侍は去つて行つた。

源六資安は、眼に入れても痛くない、彼の愛しい長子で、元服した許りの若武者。豫ねてより、相模行きを憧望してゐたのだつた。大楠公は、自分の死所へ行かんとする愛子を追返した。資長は敢て連れて行く。それは、君を佞惡と見る心を抑へ、力めて信ぜんとする、彼が佛教信者としての堅い信念からであつた。

別間では、資長登城と聞き、騒ぐ家中等を留める一學の聲が交錯して、資長の居室にも聞えて來た。——其の時は資長は、脇息に凭

れて轉寢をしてゐた。

——此頃頼に女性らしさの加はつて來る、藤岡市衛の娘千夜と、若き有望の侍小千谷浪江との睦まじき語らひが、彼の耳に聞えて

来た。

（何時迄もお前は嫁に行かないで居てくれ。永久の處女であれ、僕ははお前を美の對照として見たい。）と思つて居た彼は、二人の語らひを見ると惱ましかつた。自分が今迄父として愛して來た娘に棄てられる思ひであつた。然し賢君的な資長は次の一瞬、本當に千夜が可愛ければ、僕は千夜に立派な夫を持たせなければならぬ。あれの幸福のために。それには小千谷浪江がある。二人共相思の仲だ。さうだ僕は出發に先立ち、彼等の爲に月下氷人をしよう——

はッ、と目を覺ました。今のは夢か。不思議な夢だ。と思つて居ると、

「左金吾。」

と廊下に聲がした。資長は座を正した。父左衛門尉資清が、頭を光らせて入つて來た。

「父上、御機嫌宜しうございます。」

と、脇息、褥を勧めて挨拶すると、

「さうされては困る。僕は一介の隠居の身だ。」

資清は淋しげに笑つた。往時、頑固一徹な彼は遂に主君に嫌はれ、早隠居を強ひられる境遇を餘儀なくされて居たのだつた。

「左金吾。相模へ行くのだとな。」

「は、使を受けましたので、即刻支度を致して、出發致さうと思ひ

ます。」

「僕も既に八十に垂んとしてゐる。餘命いくばくもないと思つて居る。僕は上様の顔が見たうなつた。——此の機會を逸して他に、相模行きは一生覺つかない。それ故大殿に別れを告げる爲に、僕も連れて行つてくれ。」

「恐れ入りまするが、父上。」

「いけぬと申すのか。源六は連れてても、何故僕はいけぬのだ。」

「それは、今度の伺候は急なる故、駒を以て走るの、御老體には御骨折と存じます。」

「馬鹿者。老朽したりといへども資清は、永享の亂を初め、數度の合戦に古河公方を打ち破つたのだ。其方如きに未だ敗けぬぞ。我先祖、源三位頼政は喜壽に達し、宇治を挟んで奮戦せられた。其の十代目の血を受く資清として、祖先の名譽にかけてもまだ敗けぬぞ。」

と何時に似合はず怒氣を含んで云ふのだつた。資長は考へた。子は殺しても親だけは、殺したくない。

然し、一瞬彼の頭に、主君を信ぜよ！。といふ堅い「信」の念が起つた。

「では宜しうござります。御同道仕ります。」

二

二十四日 末刻——太鼓の音と共に岩槻城を出た十三騎は、資長、資清、資安を眞中に、一路中仙道を南行した。一行には昨夜の功により、藤岡市衛の娘千夜と假祝言をしてきた、近侍小千谷浪江が加はつてゐた。浪江は資長に

「其方には新妻があるから、來ぬでも良い。」

と云はれたけれども、領く筈の者ではなかつた。

時は文明十八年、永享の亂を初め其他色々な紛争から、世の中は麻の如く亂れて居る。堀越公方政知と古河公方成氏、それに扇ヶ谷、山内の兩管領家の四家が對立し、その下に千葉、佐竹、小山、宇都宮等の八將が紛糾して居た。それが戰國初期の關東の形勢であつた。だから一國一城の主ともあらうものが、僅か十騎ばかりで旅をするに云ふのは、餘りにも無謀な動作であつた。資長は、城を出る時、見送りの家老に、

「儂が途中横死でもしたら、其方達は徒らに騒いではならぬ。速かに城を主家に明渡して、二心なきを示し、共に上杉家を守れ。」

と云つたのであつた。

一行は西日を浴びて江戸を通過した。

江戸城には、弟資朝が居た。——然し急ぎの旅だつたから、兄弟

の面は歸途に延ばしたのであつた。

河崎に宿をとり、旅宿のものが領主の來賀と騒ぐ隙をも與へず、翌朝は疾く發つたので、もう鎌倉をも抜き、由比ヶ濱へと差し懸つてゐた。

我が庵は松原續き海近く

富士の高嶺を軒場にぞ見る。

そこは、當時の歌才として知られた資長が、上京の折、時の主上へ奉つた名歌を裏切らぬ風景であつた。寄せ來る浪に馬足を濡らし、涼風を浴びて、十三騎は西へ西へと急ぐ。

（若し殺されるとしたら。そして斬抜けて逃れたとしたら。——その時は恩義もない。忠信もない。只復讐の鬼となるばかりだ。儂を頼つて集來する關東六萬の兵を動かし、兩公、管家を一氣に潰し、武田を抜いて木曾街道へ衝き出で、村上、小笠原を従へて、美濃に入り、土岐を倒せば、目指すは唯京師——）。

馬上退屈な資長は、五分刈頭を包んだ頭巾の下で、健氣に馬を進める資安の後姿を見やりつゝ、空想を凝らして居るのだつた。

（源六とても、儂に勝る強者だ。儂が天下を平定せば、彼奴はしつかり守るであらう）。

突然資長は空夢に覺めて笑ひ出した。

（空想だつた。馬鹿な。假にも主君を潰せば逆臣だ。儂は殺されて



も叛くまい。——
 あゝ、僕は又主君
 を疑つた。君を信
 じさへすれば、こ
 んな心は起らない
 のだ。お前は入道
 したのに何故そん
 なに疑ひ深いの
 だ。資長よ。信ぜ
 よ主君を。迷ふな
 左金吾。

彼は自らを警め
 た。そして遅れる
 馬に鞭打つた。先
 頭の一騎は既に山
 道を辿つてゐた。

資長等が大場城へ入つた頃、岩槻城殘留の士に告げられたのは大
 きな禍ひと云ふ事であつた。——門衛が一通の書を家老太田垣一學
 の下に届けて、

「只今、一人の浪人風の侍が参り、お家老に渡してくれと、書面
 を置いて歸りました。」

と報告したのであつた。一學が何氣なくそれを開いて見ると、
 某は先夜、御城主の首を狙ひ、不覺を取りし者に候。捕へ
 られし際、豫期し難き寛大なる御恩に預り候爲、良心の可責に
 堪えかね候故、茲に一切を告白申上げ候。

某は秩父に住む貧困なる野武士に御座候。朋僚の勧めに
 て、さる御武家より頼まれ申し、刺客に入り込みし者に御座候
 段重々申譯無之儀と存じ候早速そのものと絶縁致し、一切を清
 算致し御詫び仕り度候。

その武家は山内家の家臣にて、吾等如き浪人を集め、當城下に
 潜人致し居るものに御座候。山内家の當主は親交狀を扇ヶ谷家
 へ送り、太田資長殿斬奸狀を之に副へ申候由に御座候。扇ヶ
 谷家は之を信じ、七月二十六日を期して、資長殿を大場城糟屋の
 莊に謀殺する計畫を立て居り候とか承り候。何卒充分御注
 意ありたく存じ上候。と書いてあつた。一學は蒼然として眠い
 た。

凡ての暗躍が暴露されたのだ。然し最早や主君の資長は大場城へ
 着いてゐる頃である。

「一大事です。浪人共數名町家に亂入し、金子を強奪し。續いて組

屋敷に亂入して、足輕藤岡市衛殿を殺し、息女千夜殿は行方不明であります。

息せき切つて一人の近侍が報告こ來た。

「何！ ウー。家臣一同に總登城の太鼓を打て。お家の一大事だ。浪人共には非常線を張れ。」

流石の一學も手を震はして叫んだ。

○ ○ ○

「資長はまだ來ぬか哺。」

と定政は尋ねた。大場城櫓屋の莊、九十疊の廣間に、當主定政の誕生の宴がはられたのだつた。

正面には定政。居流れるは扇ヶ谷の重臣數十名。

「駒を飛ばして登城致されたので、唯今疲勞を休めて居られます。

追つゝけ参りませう。」

と、宿將本間若狹守が答へた。

其の時外の廊下を、資長は資清、資安と大紋の袖を翻し、正装

して歩いて來た。資長は

「源六、上様の御前だ。無禮の無い様にな」

と、愛子を戒めつゝ、家臣一黨の上座に着坐して、定政に向つて

平伏した。

「資長良久参つてくれた哺。今日は予の誕生日ぢや。家中の主なる

者を集め、酒宴を催さんと思ひ呼び寄せたのだ。遅い使で間に合はぬと思つたが、良久間に合ふてくれた哺。」

「はッ。有難き仕合せ。」

「源六か。立派に成人した哺。」

「は、何分世間知らずの不束者でござります。」

「爺。其方も老軀を推して参つたのか。」

「資清壽既に八十。餘命いくばくも有らざるを覺りました。此世の名残りに殿に謁したく。」

「さうか、よう養生するが良い。」

「は。資清は落涙した。定政は再び資長に

「哺、資長、其方が北方に武名を揚げてくれるので、予は安心ぢや。定政嬉しく思ふぞ。」

「は、ハッ。有難き仕合せにござります。」

三人は再び平伏した。定政は

「そろそろ酒宴を始めても良いぞ。」

と侍女に命じた。資長は考へた。

（定政公は僕を嫌つて居ると云ふ事だが、さうとも思へぬ。君を疑

つて居た事はすまぬ。）

幾て數人の美女の手により、酒肴は運ばれた。そして酒宴は初ま

つた。

つた。

つた。

餘興——後宮三千人の舞踊

資長は雅人に似合はず、酒席には下戸で、少量の酒に眠氣を催し、うつとりとして唯だ周圍の人々が舞踊を見て興ずるのを見ているだけだつた。

次に壯士の劍舞——舞ふ餘り屢々彼の頭上に、白劍が流れた。彼は僅かに躲すだけだつた。

「資長。盃取らず、受けて見い。」

「某不調法でござります。お許し願ひ度く。」

と平伏するを、多分に酔つた定政は、

「重ねての頼みだ。受けてくれ。主命としてだ。武人は酒が飲めなくては豪傑とは云はれぬぞ。」

と云ひながら定政は、其所にあつた七合入の大盃を取つて、侍女に渡した。

「そ、それは。」

「ならぬと申すのか。受けるならば、例へ一升でも二升でも、變りはない筈ぢや。」

「は、ではお受け 仕ります。」

女は靜かに資長の前へ來て 盃を渡した。

一口一口、飲む資長の顔は蒼白く光つて來た。彼は岩槻城で熱湯をのんだ一學の顔を思ひ出した。

飲み終つて、盃を返すと、靜かに資長は臥し俯向いた。流石定政も氣の毒に思つてか、

「濟まぬ喃。一時の戲ぢや、許せ。湯にでも入つて酔を醒ますが良い。資清も下れ。」

○ ○ ○

資長は浴槽に温つて、一昨日來の疲勞を休めてゐた。氣が付いて見ると、湯は強烈に沸いて來る。我慢強い彼も遂に、

「熱ッ！」と飛出してしまつた。そして、

「湯番の衆。」と呼んだが返事はなかつた。

「熱いからうめて下され。」

どうしたものか、誰も返事はなかつた。彼は苦笑して、手を湯に入れて見た。大分暑い。

(困るではないか。どうして熱くしてしまふのだらう。)と思ひながら、何氣なく窓から外を覗いて見た。誰も居なかつた。日はトツブリ暮れて、薄墨を流した様な夕暮であつた。

窓の外は熱い酒氣にむれた、そして女臭い俗惡な歡樂境を脱れた靜かな蟲の鳴く幽境であつた。かすかな足柄連山も靜かに眠つてゐた。

蟲の音が止んだ。人の氣配に資長は、

「湯番の衆」

「はい。」溫和しうな老人の顔が、闇中にボツカリ浮いた。資長は微笑しながら、

「熱いから喃。」

と湯の方を振返つて見た。その隙に、

ビュッ！ 其の老の手から、不意に六尺の槍が白線を引いて、彼の鼻先を飛んだ。

「あ！」資長が叫んだ時は、老人は逆に石垣に叩きつけられてゐた。

四隣に漲る殺氣。すれ合ふ武具の音。

(矢つ張り——さうであつたか。)

資長の心臓は高く波打つてゐた。今迄、自分を戒めて、主君を一圖に信用してきたのが裏切られ、定政への憎惡の念に燃えた。

「馬鹿奴。其方達や山内家が、餘り資長を訴へるので、一應詰問して見る積りで呼んだのだ。誰が殺せなどと命じた。離せ。留めるな。」

定政は、自分の豫期しなかつた事が、湯殿に行はれて居るを知つて、怒り叫んだ。——實は資長を猜む重臣等や、山内家などの讒訴の爲、定政は一時嫌つたのみで、殺意は始めからなかつたのである。然しそれが凡暴君振りの隙に、彼の名によつて計畫が行はれて

ゐるのだつた。そこで湯殿へ制しに行かうとしても、陰謀本間若狭守始め多くの重臣が、彼の淫蕩に衰弱して居る體を抑へつけて、放さなかつたのだ。

「何故留める。卑怯者ッ。——資長は本當は、家の柱石ぢや。——殺してはならぬ。陰謀者！ 何故留めるか！」

平生我儘な定政は、何でも自分の自由になつたのだが、今は家臣等の爲めに束縛されてしまつた。彼は憤怒の極に達した。そして、資長に對する慚愧の念は、勃然と惡夢に醒めた如く起つて、濟まぬといふ心で一杯だつた。

「資長。お前は僕を恨んでゐるであらう。僕はお前に對しては少しも殺意はないのだ。僕は意志が弱かつたのだ。濟まぬ、資長ッ！」

狂氣の如く叫んだ。冷笑した本間若狭守は、

「殿、既に大場城の裏山、足柄の中腹には、千阪織居之助を大將に、山内家の軍勢數千騎が屯し、資長を討てばよし、殺さざれば、一氣に當城を落さんと、押し寄せて居ります。」

一人も自分の意に従はぬ家臣等を、憎惡に燃える眼で睨むだ定政は、

「畏だッ！」と叫ぶや、手を拂ひのけて驅け出した。そして叫ぶだ。

(資長ッ！ 濟まぬ。恨むでくれるな。そしてお前は死なないでく

れ。扇ヶ谷家の爲に——」

何度も叫んだが、定政の意を資長に知らせる事は出来なかつた。

彼は忽ち抑へられた。

資長は定政を一圖に恨んでゐた。そして熱湯を浴びて、眼を火の如く燃えさせて戦つた。然し數十人の手から繰られる數十本の槍には、流石の彼も惱んだ。資長は叫んだ。

「事情を話して『腹を切れ』と云へば、僕も關東武士。有難く御受けもするが、だまし討にするとは卑怯だ。はッはは……、僕が死ねば忽ち扇ヶ谷家は滅亡だぞ。」

然し多勢に無勢、遂に資長は曾我兵庫の爲に脇腹深く槍を突き刺されたのである。

資長は死を直感すると、無言の儘で槍先を抑へた。兵庫も情ある關東武士、敢て槍を動かさうとはしなかつた。資長は苦痛を隠して、

もろもろのなき妄想を入れおきし

へんなし袋今破れたり。

と、定政を恨む餘りの辭世を一氣に言ひきると、膝をついて俯臥した。

彼の腦裏には、岩槻城に残して來た愛臣達、父や愛子の斷末魔の

姿が浮んで來た。

(連れて來なければ良かった。)

と悔いてゐた。彼は息苦しくなつて行つた。彼の脇下から流れる血は、青く見えたり、黄色に見えたりして來た。——彼は死の瞬間前、十人の近侍の一人、小千谷浪江を思ひ出した。

(可哀さうな浪江、お前は美しい妻を持つた。そして契も交さぬ中に死んで行くのだ。お前は來なければ良かった。千夜——僕はお前を愛してゐる。愛すればこそお前と浪江とを添はせたのだ。然し僕は今手を下さずとも、浪江を殺してしまつた。連れて來た僕に責はある。千夜！僕は可哀さうな御前に詫びる。済まぬ。)

彼は靜かに瞑目した。兵庫は首を斬落した。

別室に休息してゐた資清、資安を初め、十人の侍も非業な最後を遂げた。殊に小千谷浪江の懷中から、戀する千夜の櫛が飛出してゐるのは、一層哀れであつた。

(おはり)

飛んだ失策

或る日支配人がその美しい秘書を叱り付けてゐた。

『花子さん、執務時間中にラブレターを書かないやうにして貰ひ度いものだね。××商會から、コールドールと魚油の代りに愛と接吻を船荷するのかと云ふ問ひ合せが來てゐるからね』

蠟 燭 の 光



野 口 米 次 郎

京都黒谷にある法然院といふ慎しやかな存在は、私の最も氣に入つた佛寺の一つで、私は京都に行くたびに訪れることにしてゐる。私は數年前の晩秋にこの御寺を見舞つたが、丁度時も日暮れで、人一人も寺内に見えず、物寂しい松の木の間から見える紅葉がばらばら散つて、本堂の側に盛上げた白い砂山に落ちた。私は本堂のなかに足を運び、古びた疊の上に坐つて正面の佛様を眺めてゐると、何とも云へない靜寂の感に打たれた。堂内に飾つてある佛具から柱隠しといふべき細長い澤山の旗などが、日暮れ時の薄明に包まれ、私の靜寂を一層の深みへと誘つて行くやうに思はれた。私はこの時、佛教の靜寂といふことを身にしみじみと味つて、それが宗教の本精神に觸れるに最も重要條件だとさへ感じた。最初私が本堂に入つた時、正面の佛壇に蠟燭がとぼつてゐるのを見たが、それが佛殿の靜寂を醸す大きな要素とは感じなかつたが、今ここに坐つてばかりばかりと微かな黄金色の焰を放つ蠟燭を見て、御寺の靜寂がその先きから燃えあがるやうに感じた。私は今更ながらその純白な微光の美はしさに感激せざるを得なかつた。

その後私は高野山に上り、學生數名に伴はれ、夜十一時頃佛法僧を聞くため奥の

あなあぶなや

禪勝房の法語

禪勝房の法語に次のやうなのがある。

往生をどれほどに思ひきめてゐるか、といふことで、或る人が「左の拳を右の拳で打つのにうちはづしのない程と思つてゐる」と答へたのを聞いて、「あなあぶなや」といつた。自分の拳で、自分の拳を打つのでは、思はず打ちはずす場合もあるではないか、といふのである。そこで「生あるものの、死に歸せんずる程に、一定と思ふなり。」と、彼はその心境を告白してゐる。

これは、法然上人が往生をば既に「得たる思ひにて」念佛を申せ、といった御心と一致してゐると見てよいだらう。

たとへば、弓でもさうである。狙ひ定めて的に當てようなど考へてゐる様では、まだ弓をひねつてゐるだけだ。矢が既に的に着いてゐる

院へ出掛けたことがあつた。兩側に立並んでゐる苔蒸した石塔は暗黒のため定かになかつたが、そのため物凄さが一入であつたことは本當だ。高く天に聳えた巨大な杉の木はきらきらと煌く星を拂つた……季節は矢張り秋で、身に薄らさむささへ感じた。奥の院の堂に辿り着いた頃には、私は全身が寂寞に訶まれて、佛法僧のこともなどを考へる餘裕さへ無かつた、これも事實だ。奥の院には數百の蠟燭が燃えて、堂内はさほど暗くなかつたが、堂外の暗黒が蠟燭の静寂を恐ろしい程度に高まらしめて仕舞つたの感があつた。その晩、小半時間も待つたが佛法僧はついに鳴かなかつた……今から考へると、若しそれが鳴いてでもゐたなら、奥の院の寂寞はどんなであつたであらうとさへ思つて身振ひをする。私共は奥の院を離れ、もとの道を歩いて戻つたが、學生達は私と違つて聲高く語り聲高く笑つて歩いた。もとより平日のこととて静寂の感などは微塵だも覺えなかつたらしい。私は物に馴れるといふことは恐ろしいものだと思つた。今日はその時から數年立つてゐるが、私の心が奥の院の蠟燭に及ぶと、直に寂寞の感に撃たれ、高野山上の一夜が目あたりに浮んで来る。

佛殿で蠟燭を燃し始めたのは誰で、何年前からであるかは私の知る所でない。西洋の御寺でも蠟燭をとぼしてゐる點を考へると、宗教と蠟燭との關係は、國の東西を問はずに同じ心理に立つてゐるやうに思はれる。然し西洋で見た蠟燭の光は、私が法然院や高野山で見たものとは違つて、さほど物凄くなかつた。

心地で、而も離るべくして離れたる矢が、本來そのありし所、若くは、歸着すべき所に歸着するかの如くでなければならぬ。的と、矢といはんよりは己れとが、密着して間隙のない、想ひに住さねばならない。かくて不動の心意を確立し、而も充ち溢れ伸びゆく力の働きを感受せねばならぬ。この心境に至つて始めてよく、的を忘れ、矢を忘れ、弓を忘れ己れの成心を滅却して、天地一枚のうちに自然と發するもののある、境地を悟り得るであらう。

——とは、その道の者の心掛といふ。達人の悟境、自づと一なるものがあらう。

(中村康隆)

理由は明白

『どうして、グリーンランドには人が住まないのだらう?』

『君はグリーンランドじゃ六ヶ月も夜が續つて云ふことを知らないのか。』

『だつて、かまはないじゃないか。』

『馬鹿云へ! その電氣代を考へて見ろ!』

法然上人をめぐる人々

(二)

賀茂のほとりの聖者

—— 勢觀房源智上人 ——

佐々三三雄



禪房を訪れる母子

建久六年といへば法然上人ももう六十三歳になられた。比叡山西塔の黒谷を下つて、東山大谷にさゝやかな禪室を設け、専修念佛、口稱一行の法門を開いてから、まる二十年を経てゐる。その間には、證空や熊谷蓮生のやうに、高風を慕つて入室した弟子も可成りの數に上つてゐた。高倉天皇と後白河法皇とが御受戒なさるし、藤原兼實公や平重衡など顯門の人達にも徳化が及んだ。人間の要求にほんとうに應へるものは、風のやうに、火のやうに、水のやうに、早く走つた。

その年のある日である。賤しからぬ婦人に伴はれて、年の頃十二三の童子が、吉水の禪房を訪れた。何となく憔悴した容姿。神經質らしく何事かを氣に病むとも見えるその眼差。然し端麗な風采は、

この少年の生れが決して尋常ではない事を語つてゐる。「東西三丈餘り、南北十丈ばかり、このうちにたてられけん、坊舎いくほどのかまへにかあらん」と書かれてゐる程に、粗末な禪房へ招じ入れられた母子は、上人と對座した。初對面ではあつたが、今まで絶えず何かに追ひかけられてゐるやうな恐怖につき纏はれてゐた少年は、この時、初めて心安きを覺えたのであらう。ちつと上人の慈眼を見入つてゐる。母は少年に代つて、ボツ／＼とその子の生ひ立ちを語り始めた。

一の谷の戦ひ

平家と源氏との争亂は、揉みに揉んだ。平家はたうとう一の谷まで追ひつめられた。これこそ最後と、一門のあらん限りの勢力を集め、死力を盡しての抗争には、ぐんぐんと押し切つて破竹の勢で

進んでいつた流石の源氏勢にも容易に抜くことはできなかつた。互に數千の兵を擁して對陣する兩軍の間には絶えず競り合ひが起つた。名乗り合ひ、喚叫ぶ聲、馬の馳せ違ふ音など山に反響して物凄極みである。手負を受けてうめく者、刺し違へて倒れる者、取つて押へて頸を掻く者、凄惨な戦が幾度か繰り返へされるが、兩勢力は殆んど伯仲してゐて、何れに利があるとも見えない。この大手ばかりの攻撃ではたうてい埒が開かないと見て、源氏の御曹子九郎義經は搦手の奇襲を案じた。裏山から一氣に三十騎ばかりが先づ馳せ降りると、これに續いて、三千餘騎が平家の屋形目かけて馳け込んだ。その數は三千餘騎であつたが、山々に紛して十萬餘騎とも聞えたといふから、平家の狼狽の程も察せられる。

この轉越の奇襲で、さしも長い間の源平兩氏の争亂も急速にキヤタストロフイーへと近づく。平家の假屋形には火が上つた。熾々と黒煙が天に沖する。平家の軍勢は吾先きにと正面の海邊へ逃げた、甲冑に身を固めて太刀を帶いた武者達が、汀の小舟に先を爭つて二十人三十人と乗り込む。岸を離れると間もなくどの舟もどの舟も重さに堪へかねて、右に傾き左に傾きするうち、海中に姿を消す。逃げ遅れた舟には吾も吾もと二三百人の武者が取り付いてゐるの

る。

平重盛の末子、備中守師盛も漸く一艘の小舟に身を託して逃れようとした。舟が渚を離れるとすぐ、岸の上から大聲で呼ぶ者があ

る。見ると一門の武將藤原守忠度の郎黨で、豊島九郎直治といふ大力の男であつた。「助けさせ給へ、助けさせ給へ」と呼ぶ哀れな聲に、家來達が

「とても駄目です。この通りの小舟で……」

と止めるのも聞かず、師盛は

「乗せてやれ！ 岸へ着けろ！」

と命じた。家來共は仕方なしに、舟を返へすと、直治は甲冑のまゝ

岸から舷へ飛び降りたからたまらない。二三度右へ左へかしいだ

かと思ふ間に、一人も残らず海中に投げ出された。これを見た源氏の兵ども數十騎が馳せ寄つて、海中にもかく師盛達を岸へと引き

ずり上げて、

「さア、平家の御一門と見えるが名乗らせ給へ！」

と詰寄つたが、師盛は

「汝等に名乗るは穢らはし。後に人に聞け」と相手にしなかつたが、氣負ひ立つた源氏の武者にその場で倒されてしまつた。

常隨十八年

「そればかりではありません。一門の者は皆その合戦で双の露と消

え海の藻屑となつてしまひました。死を免れた者はあつても、いづこともなく落ちのびて、今もつて行方の知れない者ばかりでございます。」

母の話は續いた。

「これに伴ひましたこの子こそ師盛殿のたゞ一人の遺児で御座います。本三位中將殿との特別の御結縁もあります事故、是非とも、お弟子入りをさせて戴きたくて……」

平家の一門の者、それも小松内府重盛の孫に當ることが世に知れては、到底満足に成人できないことを母親は知つてゐた。佛門に入れて世を通れると共に、一門の菩提を弔ふより外にこの子の行くべき道はないことをよく知つてゐた。何物かに迫られるやうな怯えた姿も理由のないことではなかつた。

治承四年の暮に、父清盛の命を受けて奈良に征め入り、東大寺、興福寺の大伽藍を炎上させた本三位中將重衡は、重盛の兄弟中では、一番顯要の地位にあつたが、その事あつてから四年後の一の谷の戦には捕へられて、鎌倉へ護送される身となつた。その道すがらである。京都を過る時、「一目せひ會ひたい御房がある」と言つた。

「それは何處の御房か」

「東山大谷の法然上人。後生菩提の事をもお尋ね致し安心して關東へ下りたい」

これが死に當面しての重衡のたつた一つの希望であつた。上人は

この特許に應じて重衡に對面して、後生菩提の事など懇に論じただけではなく、戒を授け念佛の法門など細々とお話しなさつた。

上人の眼前には遠く十二年前の記憶が呼び起された。「本三位中將との特別の御結縁もある事故……」といふ母の言葉も蘇つてきた。盡きざる奇しき因縁であつた。盛衰興亡の亂世の十餘年間を通して、繋がる愛戀の糸である。

少年は吉水の庵室から程遠くない栗田青蓮院の慈鎮和尚の下へ送られて出家得度をして、法名を勢觀房源智と呼ぶ事になつた。慈鎮和尚と言へば、九條關白藤原兼實公の舍弟で、名聲一世に高く、天台座主に四度までも補せられた高僧で南都、北嶺兩方へかけての勢力は大したものであつたが、上人に歸仰する事もまたなみ／＼でなく、上人の中陰六七日には自ら檀那となつて聖覺法印を導師として法要を勤められた程である。上人が勢觀房を懇とこの慈鎮和尚の下に送られたのは、未だ出家得度などの一大事には、傳統を重んずる習慣であつたから、特別の配慮によるものと想像される。

やがて青蓮院から吉水へ歸つて、それ以來上人御往生の時まで常隨給仕すること十八年間に及んだ。であるからこそ上人の勢觀房に對する憐愍の情も殊更に深く、師範の弟子に對する峻嚴さと慈父の愛兒に對する覆護とを併せ、本尊、坊舎、聖教凡てを相承させたと傳へられてゐる。

一枚起請文相傳

土佐の配流から赦免の宣旨を受けて、大谷の禪房へ歸つた法然上人は、なにしろ七十九歳の高齢であつたから、長旅の所勞も手傳つてゐあらう。翌年になると、兎角健康が勝れず、一段と疲勞の様子に見受けられた。弟子達の面上には憂愁の色が日増しに濃くなつていつた。とりわけて勢觀房は氣が氣でなかつた。愈々終焉の期の近



づいたのではないかと、危ぶまれた。正月二十三日の朝、勢觀房は思ひ切つて上人の枕邊に進み寄つて、

「年來、念佛の安心を教へていたゞいてゐますが、なほ肝要の御所存を一筆書き残していたゞいて、後のかたみと致したいと存じます」

とおづ／＼と申し出た。「もろこし我朝にもろもろの智者たちの沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず……」といふ一枚起請文はこの時に賜はつたものである。彼は三十歳であつた。かくて淨土の正義

は勢觀房の力によつて、誤りなく後世に傳へられた。

これに先立つて二祖鎮西上人は東山の學窓を去つて筑前に歸り、九州一帯に淨土門を弘通してゐた頃であつたから、勢觀房の一枚起請文相傳は淨土正義の傳承の上から、誠に重要な役割を持つたものと言はなければならぬ。

賀茂の隱棲

勢觀房は物靜かで生一本な地味な性格の人であつた。懸河の辯を弄して宗論を闘はすことや、權門に阿諛して世に出でるなどは、彼の思ひもよらぬことであつた。同じ弟子仲間での法談でさへ、五六人より以上の弟子が集まつてくれば、自ら魔縁が起るであらうと言つて、止めてしまつた。たゞ隱遁を好み、自らの

行を勵む事のみを専らとしてゐた。それは、その生ひ立ちが既に述べたやうな運命であつたから、自然性格にも反映したのであらう。師法然上人の入滅はこの心持を一層鋭くした。遂に下賀茂のほとりに隠棲したり、南禪寺門前にある西福寺に籠つて上人から相承の本尊佛を安置して別時念佛を修したり、大谷の舊坊を再興して知恩院開創の礎石を築いたりして愈々信行の増長に努めた。

下賀茂のほとりに隠遁したについては、奇しき物語が傳へられてゐる。

痴人の夢

秀吉が未だ木下藤吉郎と呼ばれてゐた頃、岐阜で一日、織田の家臣等が集つて互ひに將來の大望を語り合つてゐた時、片隅にこれを聞いてゐた藤吉郎は

「俺は千辛萬苦の末漸く三百石を得たが、もう三百石欲しいものだ」と云つた。これを聞いた一同は「なんの三百石ばかり、小さなことを申すな」と冷笑した。

藤吉郎は然し落付き拂つて「出来ぬことを望むは痴人の夢だ。自分が六百石と云ふのは恐らく不可能ではない。おのれはたゞ出来ることを望むまでだ」と云つた。後に天下を統一した彼と思ひ合せて面白いではないか。

師上人の御病氣中、どこからともなく車を寄せた貴婦人があつて上人に面會を求められた。その時看病に侍つてゐた弟子達は、その場を立つて外に行く者、別室で休息する者などあつたが、勢觀房だけは障子の外に待つてゐた。障子越しに貴女の聲が聞えてきた。「いましばらくと願つて居りますのに、御往生の近づいた御様子、誠に心ぼそく存じます。さても念佛の法門など、御往生の後には誰人にお申し置きになりますか」

「源空が所存は選擇集に記してあります。これに違はぬ説ならば、源空の義を傳へたものに相違ありません」

これは上人の聲である。暫く御物語の後、その婦人は立去つたが、勢觀房は急ぎそのあとを追つた。が、車は河原を北へ進んで、いつとはなしに見えなくなつてしまつた。禪房に歸つた彼は上人に「あれはどなたですか」と尋ねた。

「あれは賀茂のほとりにおはします韋提希夫人である」

韋提希夫人とは上人に歸依した高貴の方の尊稱であらう、と言はれてゐて、今だにその何人であるかと判然としないが、勢觀房の生母は小宰相局であるとか、彼の生後間もなく入水したとか説をなすものがある。十三歳の少年を伴つて禪房を尋ねた母は生母ではないと説く者もある。それは兎に角、勢觀房は幼くして別れた母を慕つて、師上人の滅後には賀茂のほとりに隠棲したのではないだらうか。などゝ人間的な憶測も、許されさうである。



トコン 犬に注意せよ

—— 特別にお父さんはお読み下さい ——

岡 本 俊 一

太郎と云ふ子供がゐた。最初の誕生日にお祖父さんとお祖母さんが、小さい玩具の犬を贈つてくれた。その犬はビロードで出来て、垂れ耳で、褐色の目が可愛いかった。足の下には車が付いてゐたが、車の心棒が真ん中になくて、少し横にそれてゐるので、引きづつて歩くと、この怪物は氣が狂つたやうにひよこん／＼と躍り上つて、まるで鬼を追駈けて走つてゐるやうだつた。そう云ふ譯で太郎のお父さんは、その犬に『ひよこ』さんと云ふ名を付けた。太郎も、大きくなつて、口をきけるやうになつてから、その名前の意味が解つて來た。彼はその犬がとても好きで、犬と一緒に緒でなければ、どうしても寝付かなかつた。

だから、お父さんお母さんも太郎にばかりでなく、『ひよこ』にも『おやすみなさい』を云ふと云ふ仕末だ。

ところが、太郎の両親はずつと離れた新しい家に引越すことになつた。小さい太郎は引越しの間の數日を、『おぼちゃん』とところで過した。勿論『ひよこ』君も一緒だ。なければ寝られないのだから。萬事が片付いた時、太郎と犬とが『おぼちゃん』に連れられて、新しい家に行くことになつた。太郎のお父さんは驛に迎えに出てゐた。で、子供はとても幸福で、なんとなく氣恥かしくなつて、いきなりお父さんの兩足の間に首を突込んで、出て行く汽車を見送つてゐた。三人はお手々をつ

ないで、松林の間をお母さんと新しい家の待つてゐる方へ歩いて行つた。と、突然『おぼちゃん』が、うたれたやうに立止つた。

『おや／＼、私は『ひよこ』ちゃんを汽車の中へ置いて來ちまつたよ』

お父さんは直ぐうなづいて云つた。

『その話はよそうよ。何にもかも珍らしいことだらけだから、この子も直ぐ犬のことは忘れて仕舞ふよ。』息子はその時だまりこくつて二人の大人の間にはさまつて歩いて行つた。家へ着くと、お母さんが太郎を抱くやうにして迎えて呉れた。

それから大きな入口を通つて廣々とした露臺へ出ると、そこから長い／＼河が一目に見えて、そのずつと端れの森陰から蒸汽船が走つて來る。一隻、二隻、三隻……

夜になつて、太郎の寝る時間が來た。彼はすつかり疲れて仕舞つてゐたが、幸福で、すこしばかり興奮してゐた。でもお母さんが彼を露臺の上に抱き上げた時、太郎が云つた。『ひよこは！』

お母さんは眞面目な顔をして云つた。『ひよこはまだ汽車に乗つてゐるのよ、ひよこは明日こゝへ着くの。』

小供は眞ん丸い目をして親達を見詰めてゐた。——それから、燈火を消すと、彼は一度大きな聲で云つた。『ひよこ！』

『さあ、もう寝るんですよ』とお母さんはいかめしく云ひ渡して外から戸を閉めてしまつた。お父さんとお母さんは戸の外で息を殺して聞き耳をたてゝゐた。泣きも、わめきもしない。『大丈夫よ』とお母さんが云つた。『でも貴方、明日驛へ行つて、遺失物係に届けて置いた方がよいわ』

『そうしよう。然し、まあ見込みはないね。あれは大阪行きの汽車だから、ひよこを送り返されるなんて萬が一にもあるまい。』

泣いて、怒つて、一寸も寝ない——夜になつても同じことだ。新しい家も河も、蒸気船もありはしない。ひよこ、ひよこ！ ひよこは青天の黒雲のやうに、三日の間に凡てのものを蔽ひ包んで仕舞つた。

『俺は明日東京へ行つて、新しい「ひよこ」を探して来るよ。』とお父さんがお母さんに宣言した。

『見付かるかしら？』

『然し、この儘じゃ、やり切れんよ』

そこで、お父さんは出かけたが、とう／＼命にもかへ難い『ひよこ』と同じ犬を見付け出



した。彼は方々走り廻つて、金も大部費つたが、『有難い／＼、これで太郎は今晚、ぐつすり寝るだらう。』

彼はすっかり嬉しくなつて仕舞つて、世界中のものに、良いことをしてやり度いやうな

氣持になつた。歸りの汽車の中で、一人の小供が彼の向ふ側に座つてゐた。太郎とはまるで様子が違つてゐる。青色くて、黒い髪で、弱々しくて、それに大分氣むづかし屋らしい、然し子供は子供だ……同じ箱に紳士が二人ゐたが、そんなことはお父さんの氣にならなかつた。彼は子供に話しかけたら、顔をしかめたりしたが、子供は相變らず氣むづかしい顔をしてゐた。で、お父さんは靴の中から、紙包みを取り出して、ゆつくりと紐を解いた。子供はじつと見てゐる——中に何かあるんだらう？ 彼は紙包をほどいて、端の方を少し開けて見せた。

『ひよこ、ひよこ！』とお父さんがまじめくさつて云つた。

『うおう！』と子供はうれしそうに返事をした。

それから、この旅行はすっかり愉快なものになつた。不思議なことに隅の方にゐた肥つた男までが、まるで本當のお祖父さんのやうに思はれて來た。子供は『ひよこ』をその男

の方へ引張つて行く。お父さんは後から尾つぽを引張る、子供は歡聲を上げる。

『何處までおいでゝす?』と彼は子供の母親に聞いた。

『静岡です。貴方は?』

『もつと手前です。でもお子供さんもそれ迄には犬に厭きてしまふでせう。』

『でも解りませんわ。』とその婦人は云つた。

『うちの子供は好きになり出したら、どうにも手に負へなくなるんですの』

『はゝあ、でもまだ少しばかり時間がありますな。』とお父さんは一寸考へてから、『ひよこ』の吠える眞似をした。

お父さんは包紙と紐を取り出して、『さあ、ひよこはもうお家へ歸るんですよ。』

子供はしげしげと彼の顔を見てゐたが、犬が紙包の中に消えると、わあつ! と泣き出した。『ひよこ!』と肝高く叫んだ。車中が皆んなこつちを見直す。子供はいよゝ泣き叫ぶ。そこでお父さんは

『別に包んで行かなくとも良いのですから、

も少しの間抱かして置いて上げませう。』

子供は『ひよこ』を両手に抱えたと、にっこり笑つた。魂を清めるやうな笑、太郎とそつくりな……

汽車の動きが緩くなり、汽車は止まつた。

『さあ、ひよこをおじさんに返しておくれ!』子供は犬を確り抱へ込んでしまつた。

『これ! 離すんですよ。』

『お早くお降り下さい』と車掌。

『犬をおはなさない!』

『ね、その犬を返して頂戴! 家には小さい子供がゐて……』

『どうぞ、お早くお降りをお願いします。』

混亂、當惑。子供は傷々しく泣き叫ぶ、車

掌は笛を吹く、お母さんの手はしがみ付いてゐる子供の指を離させやうとする、子供は一層激しく泣く、——だが結局、お父さんは『ひよこ』を持つて外へ出ることが出来た。が、

『好きになると手に負へないのです。』と云つたあの母親の言葉を思ひ出して、彼は全く當惑して仕舞つた。汽車は走り出した。と彼は

いきなり汽車の窓から犬を抛り込んだ。汽車は速力を増して来る。窓から子供と母親が顔を出す、子供は『ひよこ』を抱えて……

お父さんは暗い松林の間をのろゝ歩いてゐた。別に急がない。家に着く頃は、丁度子供の寝る時間だ。彼はきかれるに違ひない、

『ひよこは?』お父さんは後悔も、誇りも感じなかつた。唯彼は悲しかつた。どこかに間諜ひがあるのだ。……一人には與へて、一人は泣かせる——?

お父さんは家の戸を開けた。二階では子供が歡聲を上げた。ゆつくり、黙つて階段を上つて、スリッパを踏いて——戸を開けた。

其處には彼の幼い息子が、パンとミルクを置いて卓子の側にすわつてゐる。そのそばには『ひよこ』が立つてゐる。首の廻りに、とても大きな荷札をつけた『ひよこ』。その荷札にはスタンプが澤山押してあつて、おまけに『犬に注意せよ!』と云ふ文字が書いてある。

『犬に注意せよ!』とお父さんはゆつくり云つた。こりや面白い——世界が再び明るくなつた。

(をはり)

幻 住 記

十九世紀のある國のある町に、がつちりとした老舗と美人で評判の女房を持つ小間物屋があつた。そんなに金持ちでもなく、またそんなに貧乏でもなく、人間が紳士で、まいにち、平凡に、おだやかに、暮してをつた。老舗と云つても、ほんの一町内だけの話、女房が美しいと云つてもたゞその町内だ

けの噂で、決して、特別な存在ではなかつた。先づ／＼草時計の針が、ほどよい太陽の光に、毎日、まはりつゞけると云つたお天氣のいゝ小市民であつた。
ところが、浮き世のことほど判らぬものはない——この紳士の小間物屋が、いつのころからか、とても凄味な存在にな



つてしまつた。その糸ぐちはかうだ——おなじ町内に軒をならべる商人が人の判が、りか何かでひどく苦しんでゐた。うっかりすると見世の大戸もおろさねばならん。妻と一ダースほどある子を連れて夜通げでもせねばならん。金策の道も盡き果て、蒼い顔をしてをつた。それが、ある日、ふつとこの小間物屋に出逢した。小間物屋はいつもの穏かな微笑をうかべてをつた。檸檬水が身うちを流れるやうな、幸福な顔をしてをつた。生きてゐる間はもとより、天國へ行つてからも、その日に迫はれぬだけの、動産と不動産が、もうがつちりと出来たと、さう云ふ落つきが、爪のいろにまで見えてをつた。行きずりに、いゝ隣人らしい笑顔を投げて、わかれやうとする姿が、いま、地獄の苦しみを舐めつゝある商人の眼に、慈眼視衆生の佛さまのごとくに寫つた。商人は思ひ切つてそのうしろ姿に追ひ縋つた。さうして自分の窮狀を訴へた。

——さうですか、いくら御入用なんですか？

餘計なことは訊きも聴きもしないで、それだけ云つた。商人は手を揉みながら、その金額を告げて

——保証人も無くはありません。見世を抵當に入れてよろしければ、さう致します。利息も高くて結構です。短期……

半としでいゝんです。

そんなことを、「薬でも掴む」やうに、夢中で喋つた。

——承知しました。明日公證役場へ御同道しませう。その節小切手を持参します。

商人は涙をうかべて、幾度もお辭儀をした。さうして、相手の手を握り締めながら

——奥さんが歿くなられてお淋しいでせう。もう幾年……あゝ去年の、さうさう、お寺の庭に連翹の花が咲いてゐましたね。とするといま時分……？ あゝ今日が御命日でしたか。それは……お嬢さんも、大きくなられましたね。お四つですか。いや、何かと御不自由でせう、どうぞ御遠慮なく、宅の女房に仰言つて下さい。あの通りのじやう馬ですが、なあとがつちりと、轡をはめてあります。わたしの鞭次第でどんなことでも致させます。いえ、お宅のあの歿くなられた奥さんの足もとにも及びませんが……ほんとうに美しい、いゝ奥さんでしたなあ……さう、連翹の花が咲いてゐましたなあ……

小間物屋の紳士は、そつとその商人の手を拂つて、軽い會釋をして立ち去つた。商人はあゝめんと、そのうしろ姿を拜んだ。

それから半とし、ちきに經つて、向日葵の花が太陽に燃える頃となつた。商人は、むろん、どうにもならなかつた。しかし、相手が紳士だから、そのわけを話せば、もう半としくらゐはどうにか待つて呉れるだらう、さうお肚のなかで高をくゝつて、少しばかり赧い顔をする覺悟で小間物屋へ出かけた。

——何とか、來年の連翹の花の咲くまで——奥さんの命日まで、かう云ふ事情ですから、お待ち願ひたいのです……

……期日は明日ですよ。

今日おいで下さることはありません。

小間物屋は、いつものお天氣のいゝ微笑を見せてさう云つた。

——それがねえ、明日持参することが出来ないのです。それで今日伺ひましたんで……



——いや、べつに今日そんな御心配には及ばないのです。そのお話はよしにしませう。

お茶をすゝめたり、ちかごろ出来たと云ふ細君の肖像畫を指さしたり、娘を呼んで——どうもこの水いろの眼が彼女とそつくりではありませんか、なんだか、ひきこまれるやうな……さうです、よくそんな景色に出逢すことがありますね、

すつかり見惚れて自分もなにも忘れてしまふ——そのうちに變に淋しくなつちやつて、獨りぼつちだと云ふ氣が妙に顧みられて、だが、どうすることも出来ない、離れることも立ち去ることも出来ない、淋しいなあと思ひながら、ちつと、どこまでも引こまれてゐる……ははは、そんな眼ぢやありませんか……

さう云つて、肖像畫を仰ぎ、娘を抱き締め、強く頬摺りをしたりして、いつさ

い、金の問題には觸れない。

——あゝ、やつぱりこの人は紳士だ。赧い顔をさせまいと、このやうに、態と話を外らして呉れる。明日來たら、そんな話は、來年の、妻の命日にでもしませう、連翹の花の匂ひは、むかしを思ひ出させますからね。とさう云うであらう……あゝ、ありがたい、あゝめん。

と、商人は、心のなかで十字を切りながらその日は別れて歸つた。その夜、商人の女房の國元から電報が來て、女房の父親が危篤だからすぐ來いと云ふ。商人夫婦は明日のことを少し氣にしながらも、神さまみたいな小間物屋の顔を思ひ浮かべて安神してそちらへ赴いた。

ところが、その翌々日、夫婦の不在中に、商人の見世の大戸が、法定の手續きを踏んで、おろされてしまつた。あなやと駭いた商人が、義父の葬式の途中から飛んで戻つて抗告し



たが、無駄だつた。商人は遂に破産の宣告を受け、見世も商品も家財も競賣に附されてしまつた。商人は一ダースばかりの子供と、半氣違ひになつて小間物屋へ喚きこんだ女房の手を曳いて、どこへともなくこの町を落ちていつてしまつた。この噂が、忽ち町内にひろまつた。しかし、誰も、小間物屋を辛辣だとも冷酷だとも云ふ者はなかつた。隣人として、父親として、所天として、市民として、彼の信用は、それほど絶大だつたのだ。いや、むしろ、この事件をきっかけに、彼が、困つてゐる者を捨てゝおかぬ、ほんとの紳士だと云ふ評判が、ひどく誇張されて、それからそれへ、町中に傳はつてしまつた。するとその評判を耳にして、いろんな人々が彼のところへ金策に來た。この人かと思へるやうな教育家もあつた。所天に内密の貴婦人もあつた。町の社交界で相當に鳴つてゐる紳士もあ

つた。名譽職もあつた。官吏もあつた。人氣を生命の踊り子もあつた、歌姫もあつた。聲樂家もあつた。それらの人々が、みんな彼の催眠術にかゝつてしまつた。さうしてあの商人のやうに、初手は涙で拜んだ。終りは涙で、血の涙で、怨んだ——ある者は、ステージを失つた。ある者は、虚榮の市を失つた。またある者は、世間を窄めた。未來を棒に振つた。家庭を失つた。生命を淪ぼした……相當の紳士が、奴隸のやうに跪拜き、女のやうに泣き縋つた。それも無駄だつた。相當の淑女が、賣笑婦のやうに媚笑し、乞食のやうに哀願した。それも無駄だつた。

考へて見ると、この人々は、みんな自己催眠にかゝつてゐたのだ。苦し紛れに、世間の噂を早呑込して、彼を神さまのやうに思ひこみ、最後の破局が來て、やつと悲劇に眼醒めたのだ——最初に納得して書き入れた證書の期日が、すなはちあのれの破滅の時日を示してゐるやうとは、それほど最後の的なものであらうとは、夢にも考へられなかつたのだ。

見かたに依つては、この小間物屋の紳士は、世間の假面を、痛快に剥いでいつたとも云へやう。しかし、その假面には、血が滴たつてゐた。肉まで喰つてゐた。そのやり口が、あまりにも惡魔的であつた。

だが——何が彼を、そんな風にさせたか。彼は元來、そんな凄惨な人間ではなかつた筈だ。おだやかな、お天氣のいい、小市民であつた筈だ。この町の或る町内に世襲的な老舗を持つ小間物屋の紳士であつた筈だ。たとへ人間が、どんなにびつくり箱であらうとも、この變りかたは、あまりにも奇蹟的であつた。

いや、いや、それには、譯のあることだ——あの商人の事件以來何年か経つて、彼が、すっかり町の惡魔になりきつたころ、その吸血鬼ならなくに、石像のそののやうな靜かな唇もとへ、連翹の花の花びらを押しつけながら、乾いた眼をして語りだした、彼の懺悔ばなしに耳を傾けやう……

——御承知のとほりわたしは結婚後三年して妻と死別いたしました。わたしは妻によつてはじめてこの世の美しさを知りました。生き甲斐のある人生を體得いたしました。妻は諺のとほりわたしの「よりよき半身」でありました。妻は美人でございました。いえ、目鼻だちや姿かたちから申すのではありません。わたしの眼にうつる、胸にひびく妻は、さうした平面的な、形式的な、ものではなく、繪と音樂と彫刻とが渾然と融けあつた、なんともありがたい、魂に迫る美しさ

を持つてをりました。

さうです、あるひはわたしが妻に溺れて、まづたく眼が無かつたのだとお解りになるかも知れません。さう仰言られると一言も無い次第ですが、しかし、實際、この妻ゆえに、わたしがどれほど紳士になつたか、どれほど町内の信望を集めたか——云ひ換へると、わたしは、この世をありがたく思ひ、毎日を幸福に浸つて暮しましたから、どの様な目に逢つても、不平を云つたり、怨んだり、立腹したり、僻んだり、などすることがありません。あらゆることを善意に解釋いたしました。それがみな、この妻のお蔭であつたのです。

そんなわけで、いよいよ妻が息をひきとりました時にも、わたしは、ほんとうに氣違ひのやうに悲しみました。わたしは妻が生前愛してゐました女中に命じて、ありし日のとほりに、妻の亡骸にお化粧をさせました。いま浴室を出たやうな、その顔を枕もとの蠟燭の光で眺めましたとき、いかにも起きあがつて何か云ひさうな氣がして……だもんですから、既に醫者の宣告も済み、懺悔僧のことも済ませたあと、三日間と云ふもの、わたしは妻に、葬具屋の持つて來た死帷子も着せず、妻が好きだつたびろうどの着物の、胸に黄金の十字架の垂れた眞珠の首飾りを装はして、思ひ出を誘ふ連翹の花の香

りを枕邊に漂よはせました。

だが、奇蹟はむろん起きませんでした。妻は「デイ・プロファンデイス」の聲に送られて彼女の十字架の下、永遠の寢床へはいりました……それは、わたしが、はつきりとこの二つの眼で見たんです……柩に打ち込まれる釘の音、いま掘られた墓穴の土の肌のいろ、その上へと落ちてゆく小石まじりの砂の音……いえ、彼女が、この世から墓の彼方へと向ふ最後のその一瞬まで、おそらくわたしほど、彼女の傍につきつきりにしてゐた者は他にないのです……

ところで、何故にこのやうなことを、ことさらにわたしは申しあげねばならないか!?——お聴きください。

そんな風に妻を葬つて半とばかり経つた、町のお洒落な青年が、胸に向日葵の花を挿して歩いてゐる頃——ある日、わたしはふと思ひ立つて、妻の墓地へまゐつたのです。その墓地で、一人の婦人を見まはした。ツバの廣い帽子を被て、黒子のついた細い網の面紗をかけてゐました。わたしの姿を認めると、ぎよつとした様子で、慌てゝ顔を反向け、遁げるやうに門外に立ち去りました。その一瞬、冷いものがわたしを脊すじを走り、足は、そこに釘づけになつてしまつた——わたしは見たではないか! あ、わたしは、三年間、

まいにち刻みこまれた視線を！ あ、静な、さびしい、ひきこまれるやうな水いろの眼！ いや、いや、夢であらう、わたしはあのやうにして彼女をこの十字架の下に葬つたではないか。おほかたあまりに彼女の思慕にのみ生きてゐるために、わたしは幻を見たのであらう……

わたしは額の汗を拭ひながら、彼女の十字架の墓標のまへに跪拜しました。さうして眼を閉ぢると、しかし、いま、そのあたりの薔薇の花びらをスカートの端で蹴散らして立ち去つた婦人の足音が、絹摺れの音が、まさしくと浮んで来る。門外には辻待の馬車を見た、婦人の姿が門外に消えると同時に、その車輪の音が、蹄のひびきが、遠退いていつたではないか！……

わたしは憑かれた人のやうに、躁狂ぎ、鬱憂ぎ、悶えました。わたしはその午後から夜へかけて、あらゆる手段を盡して、町の辻馬車を調べました。さうして漸くその夜更けに、けふ、町のあまり知られない二流のホテルから、あの墓地へ一人の婦人を乗せていつたと云ふ馬車やを発見しました。わたしは早速そのホテルへ飛んで行つて、宿帳をひつくり返しました。

——そのお客さまなら、御夫婦とも日暮れの汽車でおたち

になりました。御主人はこの半としほどの間に三四度お見えになりました。奥さまはこんどがお初めてです。御商賣はA市の葡萄酒屋さんです。葡萄酒を見まわりにいらつしやる序に、手前どもへお立寄り下すつたのです……

マネヂャーがそのやうに説明して呉れました。宿帳によると、夫人の年輩こそ似てをれ、もとよりわたしの見も聴きもせぬ名前の夫婦です。

あゝ、自分は何をつまらぬことと考へてゐるのだ。他人の空似と云ふことは随分あることではないか。さう思つていつたんは打消したが、家に戻つて、ひとり、自分を待ち侘びた涙のあとを残しながら眠つてゐる娘を、そつと膝に抱きあげ頬摺りをしたとき、その、眼を醒ましてにつとわらふ娘の眼を覗いたとき、あゝ、この眼だ、この眼であつたと、またしてもあの墓地のまぼろしが、わたしの胸を搔きみだす……それから一週間、十日、半月、と、わたしの悩みは涯しなくつゞく。もちろん、他人に話の出来ることではない。常識から云へば、こんな馬鹿な話はおよそありません。しかし、どうにもまぼろしが消えない。いつたん萌した疑ひが、悪魔のやうな執拗さで、わたしの魂を悩まし抜く。

しかし、妻ならば、何故にこのわたしの胸に歸つては來な



いのか？ 何故にわたしを避けるのだ！ かあいゝ子までなした仲ではないか？ あのやうに貞淑な彼女であつたではないか？ いや、いや、やつぱりこれあ、わたしの迷ひだ。忘れやう。あゝして神の召によつて、この世を去つた彼女を疑ふことは、これはおそろしい罪だ、神への冒瀆だ。

砂の上に書くやうに、幾度かさう考へ、考へてはまた迷ひました。その迷ひを繰り返してゆくうちに、魂の傷手が次第／＼に深まりゆく……わたしは妻のあの水いろの淋しい眼を穿鑿したのです、まるで嫉妬ぶかい良人が、妻の私室の簞笥のなかを掻き捜すやうに……

さうだ、曾つてわたしは彼女の生存中に、口に出したことはないけれど、ときをり、ふつと一人であるときに、彼女は、よくもの思ひに沈んでゐたではないか。あの水いろの眼が、まるで曠野にひとりある人のやうな、骨に沁みるやうな淋しさを、わたしに傳へたではないか。

わたし達の結婚生活が、近所の評判になるほど幸福だつたがために、遂に一度もわたしは、訊きもしなかつた、またそんな氣も起らなかつたが、たしか彼女には、わたし以前に、婚約の相手があつた筈だ。その相手が、何でも戦死した筈だつた……さうだ、彼女は、きつとその相手のことを考へてゐ

たのであらう。さうだ、あゝ、それに違ひない……わたしは、何か苛々した嫉妬を感じました。だが、いまさら嫉妬してみたとところで、その相手は、とつくに戦死してしまつたのだし、彼女も亦、あゝして墓標になつてしまつたのだ。およそそれ位、理窟に合はぬ話があるものではない……にも係らず、その何とも説明のいたしやうのない、云はゞ地獄の闇に閉された間罅があるにも關らず、わたしの魂は、惱みつゞけるのです……世の中に、これほど、この私ほど、呪はれた存在がありませんか。

いろいろとその邊のことを申し上げてゐては切りがありませんから、たゞ事實の筋道を申しあげます。結局、わたしは決心いたしました。さうして實行いたしました……ある夜、月も星もない、眞闇な夜でした、わたしは彼女の墓をあばいたのです……法の許しも受けないで、そつと自分の手で、彼女の柩を掘りおこしたのです。

……はい、それは、空でした。蓋はありましたが、何者かぐ振ぢ明けた痕跡が残つてゐました。ともに埋た連翹の、花は失せて枯枝に、彼女の髪の毛が二すぢ三すぢ、もつれて残つてをりました。

——あまりにも幻怪な事實に直面して、わたしは身震ひいたしました。同時に、何とも知れぬ深い憤怒、絶望、裏切られた氣持が、眞闇な焰のやうに、わたしの身内に燃えあがりました。わたしを、このやうなわたしにしたのは、その焰です。わたしは、われながら恐ろしくなるやうな冷靜さをもつて、靜に機會を待ちました。わたしは、表面、どこまでも、愛妻に死別した「紳士」でありつゞけました。ときをり、傷心に耐へぬ顔をして、彼女の墓標のまへに跪拜しました——もう決して、これまでのやうに、彼女の亡き魂を祝福しなかつたことはむろんです。いえ、さうした敬虔な芝居をしなから、この世にありとあらゆる呪ひの言葉を、彼女の十字架に吐きかけたのです——

あの商人が金策に苦しんでわたしに縋つて來たのは、さうした悪魔以上の呪ひに身を焦がして、わたしが墓地から歸つて來る途中……恰も、妻の命日——ではない、何と云つたらいいか？ さう、悪魔の記念日だ——その當日だつたのです。わたしは、お墓で芝居をするやうに、紳士の役を演じました。わたしは、もう以前のわたしではありません。世の中に向つて、人に向つて、復讐と呪ひの刃を磨いでゐる。人生など、云ふものに、もう光明も期待も何も持たない。わたしは

あれほどに信じた妻に裏切られた。わたしは、何者をも信じないことに決めたのだ。商人はわたしと共に公正證書を作製した。わたしはそんなものを信じはしなかつた。債務が證書面どほりに果されやうなど、云ふことを、わたしは初めから期待しないのだ。たゞそれを期待させるやうに、いろいろと人情を混へて、餘計なことをする相手を、わたしは冷然と見まもるだけだ。さうして期限が來たら、一分一厘容赦しないで、わたしの債權を行使するだけだ。そのために相手がどう

ならうと、わたしの知つたことではない。わたしは殘忍になつた。酷薄になつた。世の中が、わたしの債權のまへに淪ぶなら、それもわたしは、わらつて迎へやう。人のためとか世のためとか、以前には、そのやうな呑氣なことも考へたが、いまは、そんな、生ぬるいことは云つては居れぬ。いつさいの裏切り者へ、わたしはわたしの腹癒せの刃を向けねばならぬ。正義も糞もない、人道も糞もない。わたしは鬼になつたのだ……

(つゞく)

落ちてゐた皮財布

公園の北よりの一隅、幾本もの老松が體をうねらして天空を壓し、植込と植込との間には散歩道が裏まで抜けてゐた。



く、向うのベンチに浮浪者が一人かけてゐ、側に子供が遊んでゐるだけである。

次郎はそこをぶら／＼歩いてゐたら道の真中に皮財布の落ちてゐるのを見出した。思ひもつけない見出し物であつた。直ぐ拾ひ上げる可きをその儘わきを通り過ぎてしまつた。今となつては振り返へることも、又落ちてゐる場所へ引き返すことも、出来なかつた。

次郎の良心はそこで逆立ちをし、自分な

らめんくつらつてゐた。皮財布に無關心であるわけではサラ／＼ない。次郎は歩き乍ら考へた。きつと中味はずつしりと重い。あの財布は第一滑り落ち易い。貧乏人の持つやうな品ではない。拾圓札が眼前にヒラ／＼と浮ぶ。そつと振り返つて見る。もうそこからは財布のありかが見えない。然し人通りはな

だ。だとすれば黙つて猫ば／＼をきめても解る筈がない。もう一度公園の周圍を廻つて電車道から元の落ちてゐた場所へ足先を向けた。俺はスガスガしい散歩をしてゐるのさ、誰が見たつてさうとより見えまい。が、彼の全身は内心不思議なおののきに震へ、眼は異様にひかつた。

いま／＼しさうに呟く彼の背後には元のやうに黒い財布が置かれてあつた。(浦田洋一)

談 相 仰 信

佐藤良智

〔問〕「佛教は無神論である。即ち佛は自己であつて萬物を創造したり、支配したりするやうな超偉力あるものが自己以外に存在するものではない」と言ふことを他の雜誌で見ましたが私が佛教に没入しやうとして常に淋しく心惱しく思ふ事です。「佛は理であり、佛を見るとは自己の行によつて苦惱を捨て得るやうになる事だとか、暗黒は自己の迷ひに過ぎぬ」とはよく聞かれますが、苦しい時の神だのみと言ふ諺にもあるやうに自分以外の大きな何物かにすぎる事が佛教では果してないものでしやうか。どうも私には自分以外の大きなものがあつて超力をもつて我等に及ぼすと同時に自分の現實は自分の因縁によつて来るものと思へるのです。それで自分はつゝまし

く行に精進すると同時に自己以外の大きな物に祈る氣持です。このとき自分以外のこの大きな超力を佛として信じることは佛教ではないのですか。(小柳生)

〔答〕貴君が疑問に御思ひになる佛教の理の一面は確にあります。佛教が創造主であつたり、支配者である神を認めないのは事實です。佛には嚴然たる理の一面が(法爾の世界)があります。佛教で理法身或は法身と呼ぶのがそれです。(眞如・如々・法性・實相等皆同じです)。この事が他の似て非なる宗教などに説かれる神と異なる佛教の佛さまの限りなく尊い一面です。しかし、それは確に佛さまの一面です。靜的な一面です。動的な佛さまの一面は、どこにお拜み申すことができるかと申しますに、まことにわが宗祖法然上人のすぢに御歸依遊ばされた「阿彌陀佛」にこそあるのです。阿彌陀如來は、窮りない大み命と窮りない御慈悲のみひかりを具へ給ひ今現に在しまし「十方を盡し礙へられぬみ光の御すがた」にて念ずるもの(口にみ名を稱する

こと)をそのまゝ自らのうちに救ひとり給ふのです。そして生きとし生けるものを救ひとらなければ(攝取と申します)をかないといふ大きなみ力(大願力)を合せ持ち給ふのです。私達はこの大きな法界(佛教の眞理に立つてこの世界をみる時それは法界です)にあつて何故この様な小さな自分といふからを作りがちなのでありませう。またどうして自分の小さな力で苦惱を捨て去る事が出来ませう。佛は自己である」といふ時は決してこの小さな自己を言ふのではありません。この小さな自己が、破れ大きな自己にたちかへつた境地です。法然上人のみ教へによれば力弱く罪深き(強い自己反省により感ぜられる)私共は己れを空しくしてひたむきに大いなるみ佛(貴君の申される超力もみ佛の一面)に歸命し拜るより他ないのであります。

〔問〕私は創刊號より御願ひしてゐるものですが御念佛がほんとうに心から湧いてきませぬ。御念佛の中にどうして祖師上人の申される様な大きな力があるのか、疑つてはいか

信 仰 相 談

ぬのにうたがつて時々疑問の煩悩につまれます。如したものでしやう。先づ御念佛が自然に出る様御教へ下さい。

(岐阜・百々壽郎)

〔答〕 御念佛の意味は前の御答への中へも出ました。また本誌の「一枚起請文」の解説をお読み下さい。

時々疑ひの起ることは信の心の深い者もあることです。信仰は實際には波のうねりのやうに起伏して進んでゆくものです。唯肝要なことは御念佛の行の杖を忘れぬことです。念佛をなすうち自然に御導きにあづかりうると信じます。御念佛が自然に出る方法とて別にありませんが疑ひつゝも努めて口に出すことがよきかと存じます。初めは人の居ない所で静かに自分の念佛の聲をききながら申すのもよいかと思ひます。また仕事をしつゝ人知れず口稱念佛する時

上人の申さるゝ御念佛の功德が沁々有難く感じられることがあります。呉々もりくつでなく、生々とした心と行ひのなかに御念佛の意味を御汲みとり下さい。

〔問〕 法然上人の「往生大要抄」を拜讀致

しましたところ「それ浄土に往生せんと思はば心と行との二つ相應すべきなり」とありますがこの心と行とは何をさへたものでありませうか判りやすく御教へを願ひます。

(金澤・信生)

〔答〕 お尋ねの心と行とは普通佛教で申します發心・修行（知目行足など言ふも同じです）に相當し、浄土の教へでは安心・起行と申します。心即ち安心のことはこの往生大要抄全體に涉り詳に述べられてあります。一口に言せば、私共の正しい心の持ち方です。これが三つに分けられてゐます。一つにはまごころ。うちにあつてもそとにあらはれても身に、口に、意に嘘いつわりのないうるわしいこゝろです。二つには深い心。どんな心が深いかと申しますと、自分を本當にみつ

める心。眞に自分をふりかへつてみれば、さまよへる、わびしき、力なきものであることに氣が付きまします。深い淵に臨んで居る様な自分、このことに思ひあたる心を信機（しんき）のこゝろと申します。このわびしき、限られたる自分を温い慈悲の心によつて抱きとつてやらうとかぎりなきいのちとひかりの御すがたで手をさしのべ給ふ不可思議の如來を信じその御力を信ずる心。信法（しんぽう）の心と申します。三つには私共の口に心に身になすすべてのよき事をみ佛のまします世界即ち壽命の、光明の、世界へふりむけひたむきにみ佛の世界へ往生しやうと願ふこゝろです。これが心です。行とはみ佛の御救ひにかなふ行ひ、即ち口に御念佛を稱ふることです。浄土の教へにはこれ以外の行はありません。六字の御名號を稱ふる中に萬行、一切行を含んで居るのです。この事は本誌の所々にみえる如くです。この心と行とは車の兩輪の様に缺ける事は出来ません。そして前の心が行に一つになつて御念佛になる時まことの世界が開けてきませう。

南無する心もち

一枚起請文講義(三)

中 村 辨 康

佛はつ法はふ然ねん上しやう人だん以い前ぜんの念ねん

(ホ) 凡てを捧ぐるもの

法然上人以前にも念佛は流行して居た。

殊に天台宗では「朝題目夕念佛」と云はれるやうに、念佛を用ひて居たし、其實踐

法たる法華三昧と云ふのは、幾日間と日を限つて専心に念佛する事だし、諸大寺には

「不斷念佛」をする「常行堂」も出来て居た。

また古くから特別に念佛を勧めた人達も澤山輩出して、念佛は相當流行つて居たの

である。例へば空也上人の「空也念佛」とか、恵心僧都の往生曼荼羅をかけてする念

佛とか、良忍上人の「融通念佛」とか、其他色々の人が念佛を宣傳したのであつた。

随て各宗共に念佛を用ゐて居た。

支那などでは、天台の第一人者だつた智者大師とか、廬山の慧遠法師などを始めと

して、非常に盛んだつた禪宗の人達なども念佛を兼ね用ゐると云ふ有様だつたから、

それから傳承して來た日本の各宗も、自然念佛を修行の助けとして、やつて居たので

法然上人の念佛

あつた。

然るに法然上人がそれらの念佛よりも、特別な意味で「専修念佛」と云ふことを唱へ出し、「選擇本願念佛」の旗印で強く念佛を云ひ立てたので、法然上人の立宗から十七年も遅くれて開宗された「達磨宗」が、真先に念佛を使はなくなり、遂に「念佛」と云へば、法然上人を元祖とする浄土教各派に限られて仕舞つたのである。

大體、法然上人以前の念佛は、二段構へで、或は手段として用ゐるとか、或は理窟をくつ付けて其効能を意識して唱へるとか、或は餘りに「念」と云ふ文字に重きを置きすぎて、萬人向きでない觀法的な意味に使用とか、さもないければ他の修養法は難行だから、辛棒の出来ない薄思弱行組が、止むを得ず之に頼らねばならぬとする卑屈な意味を含んで居るとか、いづれも「信仰」と云ふものを、そつちのけにした念佛であつた。

それを法然上人の念佛は、些つとも混り氣のない純粹な信仰の上に見出したのである。

先づ第一に修行を助ける手段として用ゐて居ない。念佛それ自體の中に目的を求めて居る。つまり阿彌陀佛の中に、人間生活を力強く意識しやうとしたのである。

第二には觀念や理窟をさけて信仰を基礎として居る。即ち如來の本願を信じて素直に如來を呼び掛ける信仰上の行爲として居る。

(一) 親縁、近縁、
増上縁

第三には「小豆念佛」のやうな數量に重きを置かず、數よりも一聲の中に眞實を求めて居る。即ち自分が唱へる念佛の功德と云ふやうな自力を認めず、唱へる聲を縁として如來の大慈悲にホレボレと傾倒して行かうとする念佛なのである。

だから、形式的な念佛ではない。謂ゆる空念佛ではない。「苦しい時の神頼み」と云ふやうな應急手當主義の念佛ではない。「溺れるもの藁をも掴む」と云ふやうな絶望的な念佛ではない。

常に佛と交流する念佛である。即ち、我、佛を念ずれば、佛亦た我を念じ玉ふ念佛である。我、佛を拜めば、佛我を見玉ふ念佛である。我、佛の御名を呼べば、佛亦たそれを聞さ玉ふ念佛である。

常に佛と呼び交す念佛であり、常に佛と呼吸を交換し合ふ念佛である。其處には一點の疑ひがない。疎隔がない、親しみと近さと強さとがある丈である。法然上人の御言葉の中に、

「人から物を得たと假定する時、既に得たのと、まだ得ないのとは、其心持の上には非常な相違のあるものだが、私は既に得た心地で念佛して居る」

と云ふのがあるが、謂ゆる「シツカリ握つた手答へある念佛」、一聲一聲にハツキリ確認して行く「決定の信」である。

阿彌陀佛に「南無」すること。

南無のこゝろもち

眞劍に「南無」する心もち。

これが念佛の信仰の姿である。

「南無」とは支那では「歸命」と翻譯して居るが、一般的には「どうぞ」と云ふ氣持である。

然し「どうぞ」と云つても、物欲しさにねだるやうな氣持ではない。

一切を投出して自分の全部をまかせ切つた氣持である。

「如來の御心のまゝに」と云ふ氣持である。

今ま之を假りに三つに分けて考へて見やう。

即す入信以前の「南無」、

入信當時の「南無」、

入信後の「南無」、

の三つである。

至誠を養ふ念佛

入信以前の「南無」は、やる瀬ない要求の心である。

暗中摸索の「南無」で、「未だ得ざる」心、不安な氣持で一杯になつて居る「南無」

である。「頼めども頼めども何のしるしもなき」念佛である。佛を祈り出し、信仰をね

だり出さうとする氣持の「南無」である。

さればと云つて何となく前途に光明はあるやうに豫想もせられるのである。

喜びの念佛

祈れとてしるしなきこそしるしなれ祈る心に誠なければ
と、疑ひ乍らも身を責めて祈る念佛である。

然し此念佛こそ最も大切な念佛であると思ふ。

此念佛に依て私達は「至誠」の心を充分に養ふことが出来るからである。「至誠が足りないからだ」と愈々益々「誠」を盡さうと念願して行くものだからである。

此の暗中摸索も畢竟は自力的な氣持が抜け切れず、すつかり「まかせ切る」事の出
來ない自己中心の心が信仰の萌え出でんとする力を押へつけて居る爲めであらう。

大概の人は此處で棒を折つて仕舞ふから信仰が不徹底で居るのではないかと思ふ。
求道心が足りないのである。

だから至誠心が養はれないのである。

然し、之を何處迄もつゞけて行くとき、私達は何時しか至誠の心が養はれ、信仰へ
と導かれて行くのである。

随て誰でも一度は経験せねばならぬ重要な過程である。

第二の入信時の「南無」は非常に高潮した氣持の上になる「南無」である。

即ち既に「得たる心地」のもので、歡喜の涙に濡れた「南無」である。「自力の氣
持」が無くなつて翻然として「他力」に目醒めた「南無」である。一切を如來にまか
せ切つた「南無」、如來の大慈悲に感泣し、如來の本願をシミジミ「我一人の爲なり」

信仰修養の念佛

と抱きしめた「南無」である。

第三の「南無」は平常の信仰生活の上に顯はるゝ複雑な氣持の「南無」である。

或時は喜びにむせび、或時は悔恨に泣いて懺悔し、或時は佛と共に語り合ひ、或時は信仰の遅々たる悲しみに祈り、或時は獅子奮迅の心で奮ひ立ち、或時は苦樂を分かち或時は如來になぐさめらるゝ「南無」である。其時其時の人間の心の動きを指導して呉れる「南無」である。

何れにしても、私達に取つては一日の中、此「南無」の心を如來の御前に致す時のみ、本心の許るす「まごゝろ」を感じるもので、私達は此時のみ「眞實」の中に浸たることが出来るのである。

然し乍ら或は「一度丈でよいではないか、さう幾度も幾度も『南無』しなくともよいではないか」と云ふ人もあらう。

成程、如來は大慈悲である。何度も念佛しなくとも一度聽いて下さつた以上、そんなに頼み奉らなくともよい筈である。だが、かうした氣持は餘りにも人間を買ひかぶり過ぎたものである。もし、さうでなかつたら自分の横着な氣持を如來の大慈悲の中に覆ひ隠さうとするものである。

もし如來の大慈悲と云ふ方面から云ふならば、既に念佛することさへ要らぬ筈である。此方から頼む頼まぬに拘らず、如來は無縁の慈悲を以て私達を常に攝取して呉れ

て居る。念佛したから、しないからと云ふやうな差別待遇のある譯がない。然し「改心する」と一邊云つたらよし改心の實を擧げなくとも、息子の道樂を其儘許るして仕たい放題にやらせて置いてそれでよいか何うか。問題とする迄の事はないのである。

私達が如來に一切をまかせると、たつた一度口で云ひ、心で思つたとて、それが何かしら少しでも生活に現はれて來なくては何にもならない。結局嘘を云つたと同じ事である。考へた丈で世の中が通るなら、こんな甘い世の中はない。そんな横着息子の一邊こつきりの言葉丈でよいと考へる根性骨を打直してやらねば癖になる。そんな横着坊主を「いいわ、いいわ」で捨て、置く信仰だつたら、其存在さへ許されないであらう。

「罪は十惡五逆の者も生ると信じて小罪をも犯さじと思ふべし」

と法然上人も云つて居る。つまりは何んなやくざ者でも見捨てないと云ふ溫かい親の慈悲に目醒めた時、其子は其親心に添ふべく眞人間になつて誠を運ばねばなるまい。

茲に一念一念を運ぶ「南無」のまことが必要される所以がある。

「念佛のみ是れ眞である」の念佛の「南無」の心もち以外、私達に何の行爲が純粹な眞實を示し得るであらうか。

「一切はそら事ひが事」のみではないか。よく胸に手を當て、反省して見るがよい。

また廣い世間には念佛を以て逃避的なものの如く考へて頭から馬鹿にして居る人もあるやうである。

然しそれは信仰と云ふものを知つて居ないからである。

信仰は決して消極的なものではない。

積極的にグングンやつて行く勇氣と元氣とが養はれるものである。

一念一念一聲一聲を生かして行く「南無」の氣持は非常に積極的なものである。

決して人間の氣持をいじけさせて仕舞ふものではない。

何處迄も何處迄も一念を貫き通して行くのが念佛だからである。

一切をまかせ切つて、出来る丈、骨身を惜まずに如來の御心に契ふ仕事の出来る生活である。

活である。

自分の仕事をするのではなく、如來様の仕事の一分をやらせて貰ふ生活である。

仕事の間に申す念佛でなく、仕事が其儘「南無」の氣持である。

だから「南無」の氣持の失せた念佛は氣の抜けたビールに過ぎない。

求道時の念佛なら求めに求め抜いて行けばよい。

入信後の念佛なら喰べても喰べても喰べあきない念佛なのである。

力強い念佛。

力の養はれる念佛。

積極生活へと導かれる念佛。

其處に本當の「南無」があるのである。

若し「南無」のない機械的な念佛なら、死んだ念佛である。

「南無」の心があつて始めて生きた念佛になる。

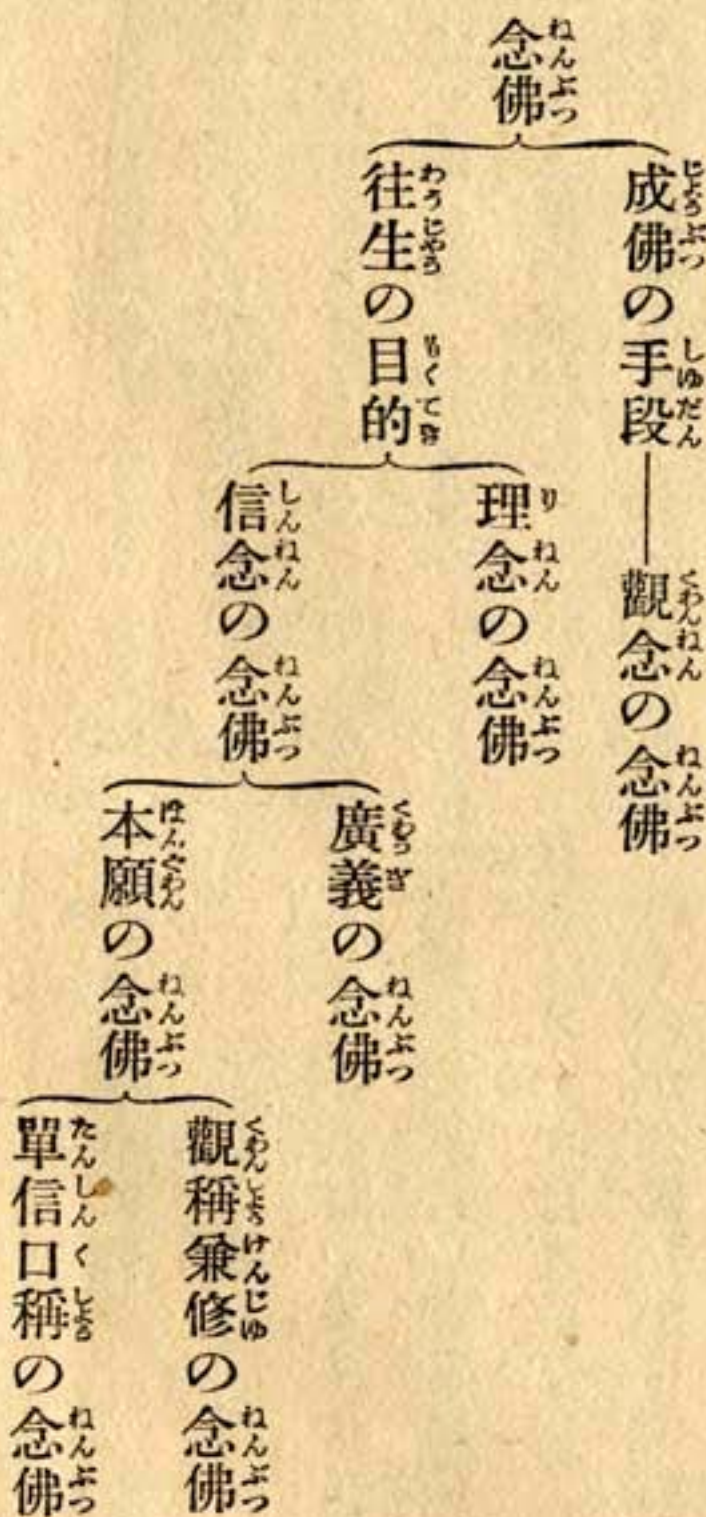
此故に念佛は手段ではない。念佛それ自らの中に生きるのが目的である。

法然上人は云つて居られる。

「一念一度の往生を當て置き給へる願なれば念々毎に往生す」

と。

もう一度繰返す意味で念佛を分けて見よう。



(選擇本願の念佛)

念佛 ねんぶつ

實 じつ 歸命の念佛 きみんねんぶつ 歡喜の念佛 くわんぎねんぶつ (入信時の念佛) にうしんじねんぶつ

虚 きょ 口先の念佛 くちまきねんぶつ (機械的なそら念佛) きかいてきねんぶつ

要求の念佛 えうきうねんぶつ (求道時の念佛) きうだうじねんぶつ

單信口稱の念佛 たんしんくしやうねんぶつ こそ、本當の「南無」の籠つた念佛である。

(第三回終り)

編輯後記

○躍進また躍進！ で、本號メ切までに法然上人鑽仰會員は五千を遙かに突破、六千に垂んとするの發展振、本部事務所は文字通り歡聲の絶え間なしである。創立三ヶ月にしてこの躍進振りは全く類を見ないところ、更に緊揮一番、旬日を出ずして一萬にして見せると役員始め事務員一同武者振り勇しく活躍してゐる。

○本誌も第三號を本會發展のバロメーターと、同人一同腕によりをかけ、足に金の草鞋をはいての奮闘大衆へ！ 大衆へ！ 興味と品位を保持して、大衆と共に語らんと云ふのが本誌のモットーである。本誌にそれが如何に具現されてゐるかを見給へ！

○『家庭を明るくする』の特輯は本誌獨特のもの、『念佛貯金』は本邦に

於ける應用經濟學者の隨一谷孫六先生の創案、今日からでも直ぐ應用出来る、水町京子女史は歌人として令名あり現に淑徳女學校に重きをなし、椎尾辨匡博士、小池重博士は云ふまでもなく、我國學界の大家、これを実行すれば必ず明るい愉快な家庭が出来なければならぬ筈である

○石川日出鶴丸博士は生理學の大家、念佛を語る先生の心境は必ず読む者の心を撃たずにおかない。

○増上寺法主大島徹水僧正の三來夜話、佐藤春夫氏の『黒谷法然上人傳』中村辨康師の『一枚起請文講義』は興味と修養とを兼ね備えた絶好の讀物として好評いよく高く、同人の鼻もいよく高い。

○小説には文壇の巨星十一谷義三郎氏の力作『幻住記』を得た。續往生繪巻となるもので文壇近來の收穫とも云ふべき作品である。新進作家南一郎氏も長編の力作を寄せられ、その新鮮な香氣は讀者を魅せず

に置くまい。

○『大場城悲史』は懸賞當選作、大正大學豫科在學中の當十七歳の少年の作と云へば、讀者はその鮮かな手法に一驚を喫するのであらう。その他本誌には讀み物を澤山に盛つたから、そう云ふ點でも必ず讀者を満足せしめると信じてゐる。

法然上人鑽仰會とは

日本文化の母胎は法然上人の思想と人格である。法然上人を知らずして、日本精神を語ることはできない。日本を知らんとするものは吾等と協同せよ、お申込み次第趣意書を無代進呈。會費は一ケ年一圓で『淨土』と月刊新聞『法然鑽仰』が毎月講讀できる。

淨土 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便認可

昭和十年六月三十日印刷納本
昭和十年七月一日發行

(定價金十錢)

品川區南品川四丁目三七八
編輯兼 佐藤 賢順

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ケ年 金一圓
(送料不要)

右の一ケ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、『淨土』及び月刊新聞『法然鑽仰』が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

大正大學教授 大野 法道著

法然上人

定價拾五錢

(送料二錢)

四六判七十頁

總ふり假名付

美麗なる繪畫表付

不拔なる信仰への道！それは巨人法然上人が説き且つ行つた道である。そしてこの道こそ現代日本を率いて立つべき日本精神へと通じてゐるのだ！！

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してもものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その條々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

再版出來!! 施本、贈答用
として、最適當なもの！

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
電話芝(43)一三五二・八四〇
振替東京八二一八七番

全日本の母性に……

御出産から一年間の發育の記録欄と育児法を網羅した寶典

スマートな編輯！ 書きよい上質用紙！

★記事内容

妊娠各月と養生法と胎兒の發育・
妊娠時に多い病氣・産後の手當と心得・授乳
に就て・生後一ヶ月から満一歳迄各月の育兒
心得・乳兒の罹り易い病氣・お七夜に就て等

母の手に
は必ず！

愛兒の發育を記録して置くと絶好の記念とな
り有事の際の有力な參考となり、又記事欄は
育兒に關する知識を總動員して頗る有益です

(頒布方法)

三錢切手十枚、或は小兒健康藥「宇津救命丸」貳圓以上の
品の外函を同封して下記へお申込あれば特に送呈致します



育

兒

日

記

一冊 30 銭

東京市日本橋一丁目

玉置合名社會

發行所

四六二〇頁
總才セツト刷

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年六月廿日印刷納本

淨

土

第一卷 第三號

定價金十錢

(送料一錢)

